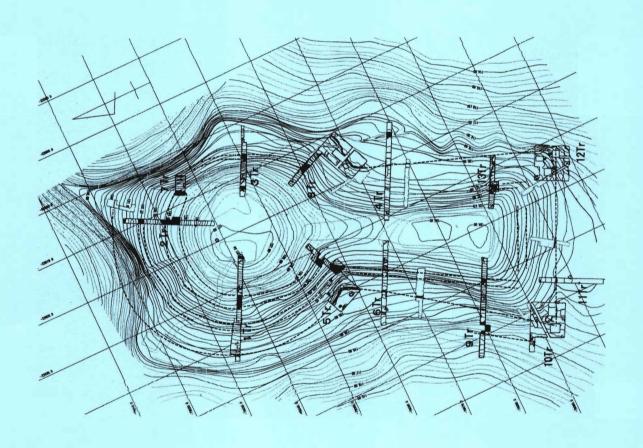
神奈川の考古学・最近の動向

主催 神奈川県考古学会



平成23(2011)年3月6日神奈川県考古学会

開催次第及び目次

日 時 平成23年3月6日(日) 午前9時35分から午後16時45分まで 場 所 横浜市歴史博物館 講堂

| 開会挨拶 | | 会長 | 岡本孝之 | | 9:40~ 9:50 |
|---------------|-----------------------|-------|-------|------|-------------|
| 趣旨説明 | | | 井出智之 | | 9:50~10:00 |
| 講月 | 垒 | | | | |
| 1 | 旧石器時代の動向 | | 諏訪間順 | (1) | 10:00~10:30 |
| 2 | 港北N. T. 地域の整理作業 2 0 年 | Ė | 石井 寛 | (5) | 10:40~11:10 |
| 3 | 神奈川県下の弥生時代研究この20 | 年 | 西川修一 | (11) | 11:20~11:50 |
| | (星 | 全休み) | | | |
| 4 | 古墳時代の動向 | | 柏木善治 | (17) | 13:30~14:00 |
| 5 | 奈良・平安時代の動向 | | 服部みはる | (25) | 14:10~14:40 |
| 6 | 中世の動向 | | 玉林美男 | (34) | 14:50~15:20 |
| 7 | 近世の動向 | | 山口剛志 | (35) | 15:30~16:00 |
| 8 | 近代・現代の動向-近代遺跡の調査研究事 | 事例からー | 天野賢一 | (45) | 16:10~16:40 |
| 閉会挨拶 副会長 | | 副会長 | 中村若枝 | | 16:40~16:45 |

※ () 内の数字は頁になります。

表紙の挿図:長柄桜山古墳の墳丘測量図及びトレンチ設定図

はじめに

神奈川県は、県中央部に位置する相模野台地を中心として、旧石器時代の人々の暮らしや移り変わりを解明する上で極めて重要な役割を果たしてきた。それは、石器群を包含する関東ローム層がその給源である富士山から近く、厚く堆積していることにより、出土した石器群の変遷を考える上で良好な条件を持っていることと、これまでに多くの発掘調査が行われ、良好な石器群の層位的出土例が蓄積されていることが大きな理由としてあげられる。

神奈川県内における旧石器時代研究は、筆者が相模野台地の旧石器時代の研究に携わるようになった 1980 年代から 2000 年までの 20 年間は大規模発掘による資料増加の時代であったが、2000 年以降は、発掘調査の激減により新たな資料の増加は少なく、「前中期旧石器ねつ造事件」の発覚後の旧石器考古学の置かれた厳しい時代とも言える 10 年であった。

相模野旧石器編年研究の進展

相模野台地では 1970 年代後半から本格的な大規模発掘の時代が到来した。寺尾遺跡の発掘調査を皮切りに、月見野遺跡群上野遺跡第1地点、栗原中丸遺跡、柏ケ谷長ヲサ遺跡などの一遺跡で 10 枚を超えるような文化層が検出される重層遺跡の調査が相次いだ。これらの良好な資料を基に、層位と石器群の関係が整理され、石器群の精緻な変遷が相次いで提示された(堤 1987、諏訪間 1988 など多数)。特に AT 火山灰降灰後のナイフ形石器文化後半から細石刃文化・縄文時代草創期までの石器群の変遷は相模野台地の地域編年ではあるものの、関東地方を代表する編年として各地域編年の基準となっている(諏訪間 1988)。

1990年代は、吉岡遺跡群や用田遺跡群、宮ヶ瀬遺跡群、田名向原遺跡など前代から引き続いて大規模な発掘が行われ、良好な石器群が蓄積されていった。用田鳥居前遺跡では大型の炭化物、宮ケ瀬遺跡群サザランケ遺跡と中原遺跡では炉跡、田名向原遺跡では住居状遺構などが発見され、さらには、吉岡遺跡と用田鳥居前遺跡での石器が遺跡間で接合する例が確認さ

れるなど、従来の石器群の編年研究や型式研究に加え、遺構・遺跡群研究へと研究の視点が大きく広がっていった。こうした成果を踏まえて、2001年3月には、神奈川県考古学会主催の考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」が開催され、相模野編年の再検討を中心に相模野台地におけるこれまでの研究が総括された(神奈川県考古学会 2001)。

石器石材研究と世界標準の年代観

この 20 年間の神奈川県を含む関東地方の旧石器時代研究の成果として、 石器石材研究とあたらしい年代観に関する研究が進展したことがあげられ る。

まず、石器石材研究であるが、石器の原料である石材がどこで採集され、どのような経過をたどり遺跡に残されたのかが明らかになれば、旧石器時代のヒトとモノの具体的な動きに迫れるようになる。石材については、相模野台地で利用頻度の高い丹沢系硬質細粒凝灰岩、箱根系ガラス質黒色安山岩、箱根畑宿産黒曜石などの石材採集地(原産地)が明らかになった。そして、望月明彦・池谷信之両氏によって開発された黒曜石の全点分析の方法により(望月・池谷ほか 1994)、柏ケ谷長ヲサ遺跡など多くの石器群の黒曜石産地分析例が蓄積された。柏ケ谷長ヲサ遺跡では、望月明彦氏に黒曜石、柴田徹氏らに黒曜石以外の石材の産地分析を依頼し、出土したすべての石材についての産地が推定されている(堤編 1997)。

搬入された石材の原産地や石材採集可能地の推定が可能になったことによって、石器原料の消費と石器製作工程、遺跡間の工程連鎖といった遺跡構造研究や遺跡群研究についても具体的に検討が加えられるようになってきた(野口 1995、島田 1998 など)。

石器石材研究の進展を受けて、相模野台地における段階ごとの石材構成の変化と行動領域の伸縮を検討し、石材環境と行動領域の違いによる地域性について検討が行われるようになった(諏訪間 2006)。こうした石材産地と消費地である遺跡や遺跡群をめぐる議論は、下総台地を中心として、下野一北総回廊という概念を用い、行動領域の研究が行なわれている(田村・国武・吉野 2003)。

1990年代末より、日本においてもこれまでに比べ微量資料の測定が可能 になり、格段に精度が上がったAMS法が(放射化質量分析)導入され、高 精度年代測定とその較正年代への換算が可能となった(小野 1998)。そして、 その較正プログラムの開発が進展し、これまで INTCAL98 の較正曲線は約24,000Ca1BP までであったのが、60,000Ca1BP までカバーする新しい14C 較正年代、Ca1Pa1-2007HULU が構築されている(イェリス・ヴェーニンガー2008)。こうした較正年代の対象範囲の拡大と信頼性の向上によって、世界的に整備が進みつつある地球環境変動と考古学資料との対比が進められつつある(諏訪間2002、工藤2005、工藤2008)。

日本列島最古の石器文化をめぐる議論

捏造発覚後は、各地で捏造資料以外の古いとされる石器群の再検討や旧石器時代の始原を探る調査や研究が進められており、いくつもの後期旧石器時代を遡る可能性のある石器群が提示されている。これらは、石器の認定、層位や年代、資料の一括性などに何らかの疑問や問題が残されており、筆者を含め、全ての研究者が認める後期旧石器時代を遡る石器群としては認定されていない状況にある。

こうした一連の調査・研究の流れを通じて、現在の日本列島における最 古の石器文化をめぐっては、大きく二つの見解が対峙している。

- ①後期旧石器時代以前の古い石器群の可能性を探り、中期旧石器あるい は移行期の存在を積極的に評価する見解
- ②後期旧石器時代開始期のX層段階を最古段階とし、これ以前とされる 石器群に対して、懐疑的、あるいは慎重に評価する見解

筆者は、捏造発覚後から関東・東海地方の後期旧石器時代開始期にあたる X 層段階石器群を、それぞれの資料観察に基づいて、出土層位、石器組成、石材構成などの基礎的な検討を進めてきたが、検討した範囲では層位的に明確な後期旧石器時代を遡る石器群は存在しないという考えに至り、②の立場を取っている。

また、日本列島における後期旧石器時代を遡る最古の石器群を認定する場合には、明確な条件を設定し厳密に評価する必要があると考えている(諏訪間 2007)。

後期旧石器時代を遡る石器群を認定するための基準

筆者が後期旧石器時代を遡る石器群として、認定できる場合は、次の4 点が明確である必要があると考えている。

①石器に残された明確な加工痕 人為的な二次加工、それも連続的なも

のにより石器が製作されていること。

- ②偽石器の含まれる可能性のない安定した遺跡立地 遺跡の立地が、礫層や崖錐性堆積物などでない場所に存在すること。すなわち偽石器が存在する疑いのない場所であることが地質学的に確認できること。
- ③層位的な出土 石器群が出土する層位の上下に由来(年代)の明らかな火山灰があり、およそ3万年以上前という層位的な位置づけが明確であること。もしくは、後期旧石器時代最初期と評価される「X層段階」石器群よりも下層から出土したものであること。
- **④石器の複数出土** 石核、剥片等の複数の資料によって石器製作の痕跡が確認でき、なおかつ接合資料によって石器群の同時性が認められること。

現在、後期旧石器時代を遡る可能性が指摘される石器群は、上記に挙げた条件の全てに適合するものは認められない。少なくても、筆者が前・中期旧石器時代の石器群として認定するためには、①~④の条件を全て満たすことが必要と考えている。

後期旧石器時代開始期の年代は、これまでの放射性炭素年代の蓄積などから、非較正の数値で、3.2-3.3万年であり(松藤 2004、工藤 2008)など、較正年代で3.6-3.8万年前と考えるのが妥当である。この年代は、酸素同位体ステージ3の中葉に位置し、地球環境変動史の中では大きな転換点になっていない時期に日本列島に突如とし、人類の活動した痕跡である遺跡が出現することになる。このことは、3.6-3.8万年前に日本列島に人類が到達したことを示すことであり、これ以前に人類の日本列島に到達していないか、到達していたとしても継続期な移動やその後の繁栄を見せなかったということになる。

筆者は、こうした前提にたって、日本列島における後期旧石器時代を遡るとされる石器群、あるいは資料群を評価している。

※紙面の都合により参考文献の一部のみ掲載します。

引用・参考文献

諏訪間順 2001 「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』神 奈川県考古学会

諏訪間順 2006 「旧石器時代の最古を考える-『X層』研究の意義-」『岩宿フォーラム 2006/シンポジウム 岩宿時代はどこまで遡れるか-立川ローム層最下部の石器群-予稿集』岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会

1. はじめに

港北ニュータウン地域の遺跡群調査が終了し、本格的な報告書作成作業に着手されて、ほぼ20年が経過した。その進捗状況は必ずしも満足のゆく状態にはないが、遺跡群調査の一定のまとめを行っておくべき節目を迎えてもいる。港北ニュータウン地域では、地域内に存在する遺跡群全体が調査の対象とされた。調査の開始にあたって、故岡本勇団長は「遺跡群研究」との表現を用いて、「集落相互の関係、集落と墳墓の関係、集落と生産の場との関係など」の把握の重要性を強調された(岡本 勇 1971 「 I はじめに」『港北ニュータウン地域内文化財調査報告(I)』)。ここでは、昨年、その試みのひとつとしてまとめた「縄文時代の遺跡群と地域集団」(『横浜市歴史博物館研究紀要』第14号)を基に、現在までの調査研究活動の一端を紹介してみたい。

2. 港北ニュータウン地域での集落址分布の変遷―縄文時代中期を例に―

まず、縄文時代中期を対象として、集落址群の分布と、その変遷をまとめる。第1 図に勝坂式期の、第2図には加曽利E式期の集落址分布を示した(記号の大きさは 集落址の規模をおおまかに表している)。勝坂式期から加曽利E式期にかけては、集 落址の分布状態に大きな変化が見られない。東日本のこの時期は、縄文時代の中でも 最も安定した社会の存続がなされたと評価されているが、港北ニュータウン地域もそ の例外ではなかった。

集落址分布の特徴は、地域の西側にあっては、三の丸遺跡を中心として、集落址が 群集する傾向が見られるのに対して、東側では、東西に細長い台地それぞれに良好な 集落址が「配置」され、しかもそれらが谷を挟みながら、近接しつつ、南北に連なる 点にある。そこに示される集落址の分布状態は、机上で期待されるような「等間隔」 のそれではない。そして、その「不等間隔」性の中にこそ、この地域の縄文中期社会 の構造が内包されている筈である。

a. 西側地区での集落址群の形成

上で概観した集落址分布が形成されるまでの過程を、時間を追って観察してみよう。まず、勝坂Ⅱ式期に、小規模な集落址が西側地区に集中して現れる(泉日向遺跡・高山遺跡・前高山遺跡・三の丸遺跡)。これらの集落は次期以降への連絡性は未だ弱いが、以後、この地域全体の拠点域の基礎を築いた点で重要である(勝坂Ⅰ式期の集落址群は以後への連絡は非常に悪く、一線が画される)。勝坂Ⅲ式期に至って、三の丸遺跡・高山遺跡・前高山遺跡といった良好な集落址が西側地区でまとまり、住居址数も増加傾向が顕著となってくる。

b. 東側地区への進出

勝坂IV式期に至って地域東側での開発が本格化してくる。まず、大熊仲町遺跡が東側地区の拠点として成立し、続いて北川貝塚の経営が開始される。更に、早渕川を渡った対岸には道中坂上遺跡が形成され、徐々に南北の集落群の連なりが形造られてくる。但し、こうした開発と集落地の整備経過には若干の紆余曲折も介在している。例えば、北川貝塚では勝坂IV式期に一定規模の集落が営まれながら、勝坂V式期には生活痕跡が極端に低下してしまう。その期間を経て、加曽利E式期には経営が再開され、南北に連なる集落群の完成に至っている(北川貝塚の経営が低調となった勝坂V式期には、近接する神隠丸山遺跡の経営が開始されている。また、北川貝塚の経営が再開される加曽利EI式期には、神隠丸山遺跡の集落規模が縮小するといった、興味深い現象が見られるが、その評価には神隠丸山遺跡の詳細な検討を経る必要がある)。

c. 集落址分布からみた縄文中期集落群

以上の展開をまとめると、勝坂II式期に西側地区に小規模な集落が複数現れ、勝坂II式期には三の丸遺跡を中心とした集落の集中域が形成される。東側地区の開発はそれに遅れて、勝坂IV式期に着手され、大熊仲町遺跡がその開発拠点とされた。地域東側での開発にあたっては、東西に細長い台地のそれぞれに、拠点的な集落を配置する方式をもってなされ、それらの集落地は、谷を挟みながら近接して、南北に連なる配置とされた。

完成された地域社会の姿は、西側の地区にある三の丸遺跡を地域全体の総合的な拠点として、全体としては、地形に従った個別生活圏を形成させながら、地域集団全体で地域の活用が図られたものと推測される。つまり、ひとつの集落址を、「固定的で排他的な集団」に帰するとは考えず、この地域に集合した集団が全体で地域を管理していたと考える。それぞれの集落地での住居数は、その集落地周辺での資源状況などと関係し、その変化による変動が伴うと想定する。その場合の典型的なシーンは集落地の無人化であるが、状況の好転などによって集落地は再開される。北川貝塚の勝坂V式期を巡る動向は、こうした状況変化の好例とされる。こうした変動がどの程度の頻度で発生したものかは、今後の各集落址の詳細な分析に委ねられている。

以上を受け、机上で期待される「集落等間隔分布論」から、地域の様々な状況が考慮された、柔軟な集落分布論への脱皮を図っていきたい。「排他的で固有の領域」を「死守する」「一所懸命」な集団ではなく、地域を全体で管理・管轄してゆく、柔軟な「地域集団」を想定する。ひとつの集落内に、更には集落内の狭小な範囲に閉じ込められた、身動きのとれない、固定した集団像ではなく、集団全体で地域を管理し、活用してゆく地域集団の姿である。第1図から第2図への一連の集落址分布の動向は、そうした地域集団形成へ向けての流れを表していると受け取ることができる。個々の住居単位の活動も、こうした地域集団の中で比較的自由なものであったと推定されるが、その実態は個々の集落址の詳細な分析と、それらの総合を待つことになる。そうした作業にあって、地域最大の集落址である三の丸遺跡の有する意義が再認識されよう。

3. 後期集落の成立と展開

後期集落に関しては、港北ニュータウン地域に限定せずに、主要な動向の概略をまとめることとしたい。後期集落と敷石住居址に関しては、1996年、神奈川県立埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団の主催によるシンポジウムが開催されている(神奈川県立埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団 1996 パネルディスカッション『敷石住居の謎に迫る』資料集)。中期終末期における中期社会の崩壊と小規模集落への分散という経過は、既に共通認識となっていた。また、この時期を特徴づける柄鏡形住居址・敷石住居址の性格を巡る議論についても、「時代性」を担った住居形態としての評価を行った山本暉久による主張が、既に一般に受け入れられている。現在の議論は、堀之内1式後半以降の、新たな動向に集中する傾向にある。

a. 堀之内1式期の集落

遺跡数と住居址数が増加に転ずるのは、堀之内1式期の後半に至ってである。集落内での住居址数も増加の傾向にあるが、小単位を基本とする居住形態はこの時期にまで残存しており、個別住居の独立性の高さが観察され続ける。例えば、貯蔵穴は個々の住居址の近くに設営され、個別住居単位がその管理主体であった可能性を示している(共同管理の可能性のある貯蔵穴群も存在している)。また、明瞭な墓域の形成も、この時期では未だ芳しくない。

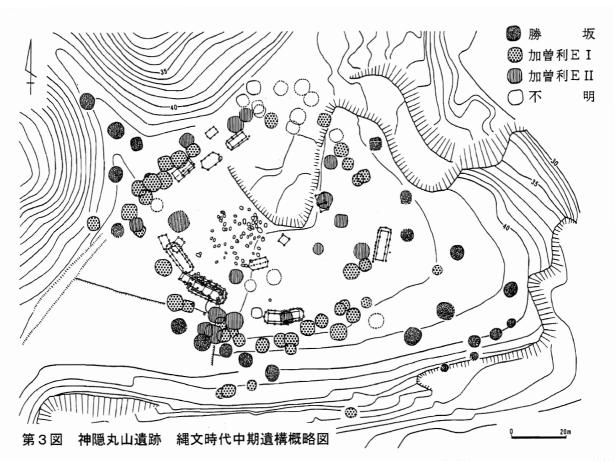
集落地に複数の住居単位が集合していても、独立性の高い住居単位の寄せ集めといった面が強く、全体として機能する部分が限定されているように受け取れる。港北ニュータウン地域では、そうした集落が一定地域に集合して集落群を形成しているが、広い台地に集合して住まう方式は採られずに、基本的に分散居住方式を引き継いでいると把握される。

b. 核家屋の成立とその性格論議

こうした状況に変化が現れるのは、堀之内1式期の終末から2式期にかけての頃で、 集落の要となる地点に、規模で勝り、同一箇所で構築を繰り返す住居址が現れてくる。 そうした住居址は加曽利B1式期へと定型化してゆき、集落の中核的な住居として安 定する。石井はこうした特徴を有する住居址を「核家屋」と呼称し、後期から晩期へ と続く集落構成の中核をなすものとして評価した。核家屋の前面には墓域が形成され る場合が多く、この住居址に住まう人物像として、「集落の長」あるいは「祭祀を司 る人物」を考えた(石井 寛 1994 「縄文後期集落の構成に関する一試論」『縄文 時代』第5号)。

こうした核家屋論に対しては、縄文社会の階層性を是認している、との反対意見(山本暉久 2005 「縄文時代階層化社会論の行方」『縄文時代』第16号)と、全く逆に、階層性社会論に立脚した、より強い機能の保有を認めるべきとする意見(佐々木藤雄 2003 「柄鏡形敷石住居址と環状列石」『異貌』21)とが提出されている。いわば 両極端の見解が提出された形となるが、階層性社会に関する議論は、現在の縄文社会 論にあって重要な分野となっている。

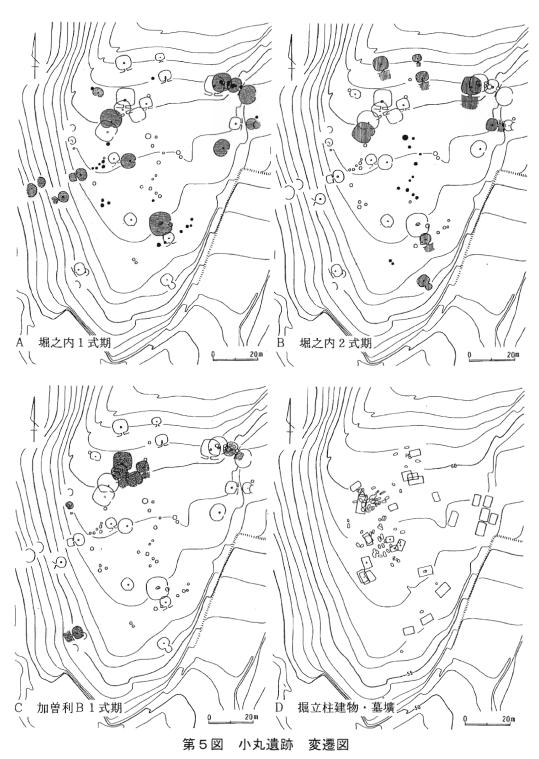




神隠丸山遺跡は勝坂V式期に経営が始まる。経営が開始された当初の集落範囲は、台地平坦面全体に及んでいる。しかし、加曽利EI式期になると東側が顕著に縮小してしまう。加曽利EI式期における北川貝塚の経営再開との関係も考慮すべきであるが、原因の全てではなかろう(第3図)。

その北川貝塚では、勝坂 I 式期の集落が北端にあるが、これは掘立柱建物跡を主体とする集落であった(点線内)。その集落は勝坂 II 式以降には継続せず、勝坂IV式期までほぼ無人の状態となる。その勝坂IV式期の集落もV式期に続かない。継続性に断点の目立つ集落跡である(第4図)。





Aでは住居址が分散し、貯蔵穴(黒丸)もそれぞれの住居近くにある。Bになると、住居址は台地根元に集合し、貯蔵穴は集落の中央に集められる。Cに至ると、台地根元に 10 数次にわたって構築が繰り返される住居址(核家屋)が成立し、その前面に墓域が造られる(D)。Dの掘立柱建物跡はBとCの段階に構築された北陸系譜の住居で、それらを含めて、環状の集落が形成されている。掘立柱建物跡が「夏期の住居」とする考え方は、成立しない。

神奈川県下の弥生時代研究 この 20 年 西川 修一

はじめに 本日の要旨

- 1 この 20 年の弥生時代情報の変化をたどる
- 2 弥生時代像の過去と未来

ニッポンの変化と考古学的なできごと

- ○世情の変化〜敗戦 (1945)、高度成長 (1960)、大阪万博 (1970)…ベルリンの壁崩壊 (1989)、ソ連崩壊・湾岸戦争・バブル崩壊 (1991)、阪神淡路大震災・地下鉄サリン事件 (1995)、アメリカ同時多発テロ事件 (2001)、郵政選挙 (2005)、政権交代 (2009)…
- ○主な考古学のできごと~登呂遺跡 (1944)…吉野ヶ里遺跡、長屋王邸 (1986)、三 内丸山 (1992)、池上曽根大型建物 (1995)、旧石器捏造事件 (2000)、歴博の「新 たな弥生年代論」(2003)、金印問題 (2006)、中野市柳沢遺跡 (2007)
- ○県内の主な弥生遺跡〜三殿台遺跡 (1961)、大塚歳勝土遺跡 (1972)、砂田台遺跡 (1986)、池子遺跡 (1989)、神崎遺跡 (1989)、中里遺跡 (1991)、海老名河原口遺跡 (進行中)…等

かながわの弥生時代像の変化 (1) 弥生時代の開始期像の変化

○本格的農耕社会の成立をめぐって

大井町中屋敷遺跡、小田原市中里遺跡、海老名市中野桜野遺跡、池子遺跡など

かながわの弥生時代像の変化 (2) 弥生時代から古墳時代への変化の具体的な姿

- ○後期弥生社会をめぐって綾瀬市神崎遺跡、横浜市赤田遺跡群、平塚市真田北金目遺跡群
- ○古墳時代への展望海老名市秋葉山古墳群、海老名市河原口遺跡

弥生時代研究の今後の期待と展望

- ○低地遺跡の可能性
- ○東日本弥生文化の多様性~たとえば三浦市赤坂遺跡と海蝕洞穴群と三宅島ココマ 遺跡の可能性等

新しい弥生時代像への展望

○時代の変転と無関係ではない考古学の描く「社会の枠組み」=むしろ「表裏一体?」 戦前 農耕社会の文化、大東亜共栄圏 (神武神話)の挫折

敗戦後 焦土からの再出発=瑞穂の国ニッポン→優秀な大和民族→争乱の時代 「弥生時代」

.....?

- ○現在進行形の「日本列島史に対するまなざし=我々が描く自画像とは?」
 - →多国籍・異文化共生、排他的な民族主義の復権、内向き日本史観=固有文化論、 弥生時代の遡

及

エコロジカルな縄文肯定史観、多視点的な日本観=いくつかの日本文化、地方からの視点…

○これからの時代像から導かれる「これからの 20 年」とは?=実証的で豊かな歴 史観の形成へ

〇弥生時代と縄文時代に関する「列島史像」の変化



登呂遺跡の調査(1950年)



佐賀県吉野ヶ里遺跡(1986年)



青森県三内丸山遺跡(1992年)

○弥生時代に関する新しい年代観



*大形建物1・大形井戸1遺稿(左) と CG 復原(右) 期間の対象や無額とくらべると口士さがわかる。



(秋山 2006 より転載)







* 弥生時代の開始は前 10 c に?





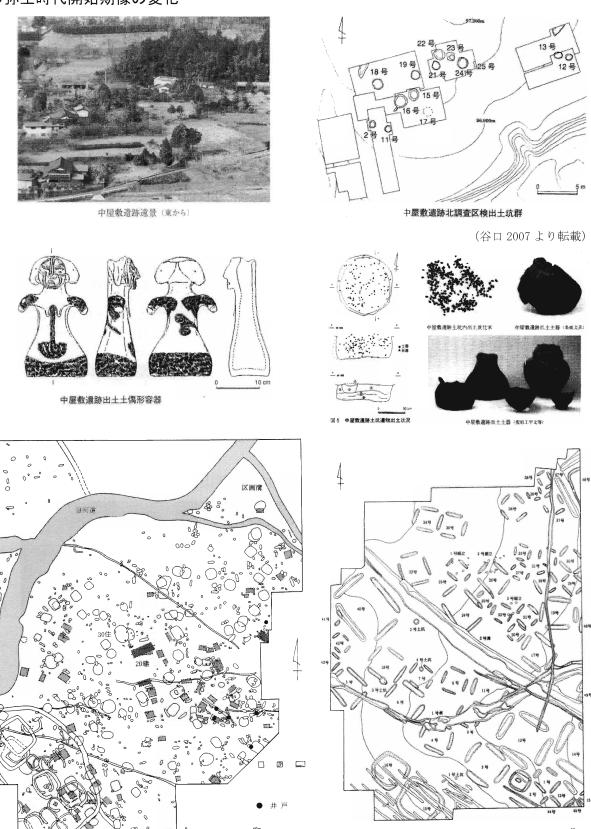
従来説との整合性は?

- ①弥生文化の東遷はゆっくり だったのか?
- ②既存の考古資料との整合性…
- ③検証や発表方法に問題 はないか?
- 4 弥生中期&古墳出現期の 社会像の再構築も必要?





○弥生時代開始期像の変化

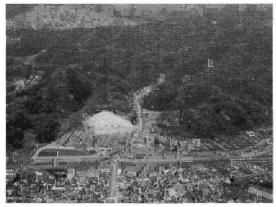


(河合 2008 より改図・転載)

中里遺跡第皿地点遺構配置図

中里遺跡第I地点遺構配置図

○池子遺跡の調査~低地遺跡への関心の高まり

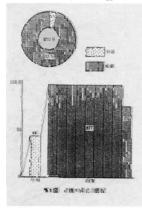






(山本他 1999 より転載)

○相模の後期弥生社会をめぐって~神崎遺跡から秋葉山古墳へ











(岡本・小滝 1992 より転載)

○海蝕洞穴遺跡と三宅島ココマ遺跡~多様性に富んだ弥生像と三浦市赤坂遺跡の可能性



三浦市毘沙門洞穴遺跡 ココマ遺跡とその遺物→ (杉山他 2010 より転載)







〇新しい弥生時代像への展望~考古学の描く「社会の枠組み」とは?





(佐古・早川 1998 より転載)

















(朝日新聞社 2010『マンガ日本史』01)

(勅使河原 2005 より転載)

1991年の検定意見によって申請本(左)の図が差しかえられ見本本(右)のようになった

古墳時代の動向

1 はじめに

神奈川県の過去 10 年程度の発掘調査例をみると、国史跡となった長柄桜山古墳群、秋葉山古墳群のほか、二子塚古墳などの史跡整備に伴う発掘調査、開発行為などに伴う相模川等河川沿いの自然堤防上の成果が挙げられる。また、多数の記録保存調査と共に、観音松古墳やかろうと山古墳などの学術調査による成果も特筆される。別表として『日本考古学年報』各都道府県の動向に記載された遺跡を一覧とした。それらを参照しながら、ここでは、2001 年以降の発掘調査を主な対象として調査成果及び研究上の位置づけについて概観していく。

2 古墳時代前期

長柄桜山古墳群は2002年に国指定史跡となり、史跡整備に向けた発掘調査が行われている。第1号墳を中心とした成果からは、後円部3段・前方部2段の築成で、後円部墳頂には埴輪が囲繞され、主体部は粘土槨であることが判明した。関東でも段築成及び埴輪が囲繞されている古墳は希少であり、外在的な性格を具えたものとして評価される。

秋葉山古墳群でもこれまでの調査成果を生かして、史跡整備が実施されている。

社家宇治山遺跡は、通算 50 基以上という方形周溝墓の存在や竪穴住居など、低地における大規模な集落の様相が判明した。方形周溝墓の主体部から出土したガラス玉や、玉造工房の存在も特筆される。近在する秋葉山古墳群との関係も、成果を受けて検討していく必要がある。

塚越古墳は周溝部分の調査などが行われ、前方後方墳であることが判明した。塚越古墳を内包する真田北金目遺跡群では、前方後方形をした周溝墓や方形周溝墓、竪穴住居などが多数調査されており台地上における大規模な集落としての様相が判明しつつある。遺跡の性格を知る上では、広大な面積を占める遺跡群一帯から平塚の低地部へ至る真土大塚山古墳等を含めた、遺跡範囲を超えた検討が必要である。

小田原城八幡山遺構群では、中世の堀切りに流れ込む形で壺形埴輪が出土している。 これまで足柄平野では埴輪の出土がなく、県西部の前期古墳の展開を考える上でも興 味深い発見である。

3 古墳時代中期

中野桜野遺跡では、48軒もの中期~後期の竪穴住居が発見されている。集落の一角では土器を多用した祭祀の痕跡と考えられる埋納土坑などがある。カマド導入期の様相を示す竪穴住居の存在も知られ、報告書では遺跡出土の土器による編年が呈示されている。初期の須恵器について、消費地である神奈川への搬入の段階を示すものと

して、甕からハソウ、坏へと受容の様相が少しずつ変化していったことが、炉からカマドへの変化と併せて窺える。

4 古墳時代後期・終末期

大津古墳群は第1号墳が前方後円墳で、三浦半島の東京湾岸で初めて横穴式石室が発見されたことで評価される。古墳は埴輪を具え、儀礼使用供具として須恵器提瓶などが出土している。群中には他2基の円墳の存在も知られる。このような小規模な前方後円墳は、6世紀後半における前方後円墳の復権と、短期間での終焉に関する問題を解明する上で示唆的といえる。

二子塚古墳は史跡整備に伴う発掘調査が行なわれている。後期では県下最大級となる 46 mの前方後円墳であり、主体部は自然石積による横穴式石室で、副葬品としては銀装圭頭大刀が出土している。遺存も良好で、鞘口や鞘尻などの金具には打ち出しによる意匠が施される。このような装飾がされるものは、全国的にも知られない希少品である。

宮山中里遺跡では、完全に埋没していた 30 m規模の前方後円墳と共に、円墳が周囲に群集する様相が判明した。後期も前期と同じような立地環境に築かれる首長墓が多い中で、いわゆる低地での発見からは、現況地形で確認できない古墳の存在が示唆され、首長領域等を考えていく上での難しさを示す調査例といえる。

北門古墳群は第1号墳が埴輪を豊富に具えており、6世紀末という時期が考えられている。1・2・5号墳は軟質の切石を用いた石室で、無袖式・胴張り複室と形態は多彩である。第2号墳などはいわゆる小石室でありながら、墳丘と周溝という構造は他と同様であり、埋葬施設の小規模化という現象が一つの古墳群の中で判明した例として興味深い。

中依知遺跡群では桜樹古墳群と中林横穴墓群が調査されている。段丘上の古墳とその上段の段丘崖に築造された横穴墓という立地で、横穴墓が古墳を見下ろす形となる。古墳は河原石積みの横穴式石室で、裏込めにはバラス状の小砂礫を使用するという構築の詳細も判明した。横穴墓は人骨の出土状況も詳細に図化され、伸展葬であったことが知られている。儀礼に用いた土器には長頸壺があり、前庭部側の玄門脇に立て置かれた状態で出土している。古墳周溝内から出土した環状把手付き土師器壺などと共に、当時の喪葬儀礼を考える上でも良好な資料を呈示している。

岡田西河内遺跡第4次調査では、凝灰岩切石による横穴式石室を内包する円墳が調査されている。古くは応神塚古墳の陪冢として扱われてきたが、調査により後期の古墳群であることが判明している。凝灰岩切石による横穴式石室は茅ヶ崎市の石神古墳でも知られ、7世紀代と考えられるこれら古墳は、相模川中流域から相模湾沿岸部の特徴として挙げられる。7世紀中葉以降となる大磯町の釜口古墳にみられる精美な切石積石室との関係が注目される。

かろうと山古墳は終末期の円墳とされ、律令期へと移行する三浦半島での最終段階 の首長墓として評価される。出土している鉄地金貼りによる鏟は、県下唯一の存在で あり、他地域との繋がりも視野に入れた首長像を考える必要がある。

河原口坊中遺跡では小石室の発見が注目される。小石室の様相は、それのみで群集する三ノ宮・下谷戸遺跡や河原口坊中のほか、古墳群内に散在する桜土手古墳群や谷原古墳群のようなあり方の二種に大別できる。いずれも終末期の墓制として位置づけられるが、小石室のみで群集するあり方について、河上氏は龍王山古墳群を例示し、改葬は「天皇等の薄葬化にすぐ対応できた人物、あるいは対応せざるを得なかった人物達の墓地」と評価している(河上邦彦 1988「終末期古墳に於ける改葬墓」)。地方における葬法からみた社会的位置付けを考える上で貴重な資料であるといえる。

比奈窪中屋敷横穴墓群からは円頭大刀が出土している。 X 線透過からは象嵌は施されていないことが確認されたが、装飾大刀を所持していた横穴墓被葬者の性格が推し量られる。 古墳と横穴墓の階層差について、7世紀中葉以降の横穴墓被葬者の社会的地位を示す資料である。

上今泉横穴墓群は、石積による共有前庭部を具えるという特徴や、県下最大級となる 22.3 ㎡の玄室である 3 号墓など、有数の横穴墓群として知られている。2007 年度の調査における特筆すべき事項として「屋根形は切り妻形で奥に行くほど二等辺三角形となる」「白土が壁面全体に塗布されている」とされている。白土の塗布は大和市内の横穴墓など、県央部のみで発見されているという特徴がある。県下でも希少な存在であり、装飾古墳との関係や、終末期にかかる墓制において東遠江との関係などを考える上で興味深い資料である。

山下居留地遺跡では後期の竪穴住居が複数軒発見されている。これまで沿岸部となる横浜市街地では古墳時代の遺構は考慮されてこなかったが、埋蔵文化財としての位置づけが明確となった。

西富岡・向畑遺跡では、後期から古代にかかる集落を現在も調査中である。終末期の竪穴住居からは、複数枚が錆着した状態で類例の知られない金銅製飾り金具の出土 もある。三ノ宮古墳群に隣接する、主要集落の様相が判明しつつある。

5 研究

古墳時代研究プロジェクトチーム『横穴墓の研究』/平塚市博物館『相武国の古墳』 /海老名市教育委員会『墳丘墓から古墳へ』/逗子市・葉山町教育委員会『前期古墳 を考える』/

川崎市市民ミュージアム『古墳の出現とその展開』/横浜市歴史博物館『横浜の古墳と副葬品』

『ヤマトとアヅマ』『古墳時代の生活革命』/神奈川県考古学会『神奈川の横穴墓』/ 小田原市

教育委員会『古墳時代の始まりと足柄平野』/東国古墳研究会/東北・関東前方後円墳研究会

6 まとめ

近年の動向をみると、多くの資料が追加され、旧知の古墳や横穴墓も学術調査の実

施から新たな認識が必要となったものもある。古墳や横穴墓などの墳墓及び、それらに関係する副葬品や埴輪などの研究は一定の進展がみられており、一部では研究の基礎となる遺構・遺物の一次的な分類や編年に終始せず、背景にある社会構造や観念領域にまで言及した論考も見受けられる。

現時点までの成果として、かながわ考古学財団編『掘り進められた神奈川の遺跡』が有隣堂により刊行されている。県下の主要遺跡が、各時代に渡り記載された概説書として位置づけられる。

これらの歴史的資源について、考古学会やシンポジウム等で検討し、それらを還元 しながら神奈川の歴史を改めて構築する必要があり、更なる深化が図られることが期 待される。

【古墳時代に関係する近年刊行された論文など:一部抜粋】

明石新 他 2001 『相武国の古墳―相模川流域の古墳時代―』平塚市博物館

東真江 2007「秦野盆地における古墳時代後期について」『研究紀要』第8号 桜土 手古墳展示館

安藤広道 2008「横浜市 観音松古墳」『第 31 回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』神奈川県考古学会

稲村繁 2005『神奈川県の古墳 (IV) -神奈川県古墳地名表-」『横須賀市博物館研究報告 (人文科学)』第 50 号

植山英史・柏木善治 2002 「関東南部の装飾された古墳 (横穴墓)」 『第 51 回 埋蔵文 化財研究集会 装飾古墳の展開』

植山英史 2010「相模」土生田純之編『東日本の無袖式横穴式石室』雄山閣 海老名市教育委員会 2002『シンポジウム墳丘墓から古墳へ〜秋葉山古墳群の築造〜 発表要旨』

大倉潤 2001「墓前祭祀に関する一考察」『研究紀要』第3号 桜土手古墳展示館 小田原市教育委員会 2006「久野諏訪ノ原丘陵の遺跡-久野古墳群と周辺遺跡-」『小 田原の遺跡探訪シリーズ』2

小田原市教育委員会 2010『シンポジウム 古墳時代の始まりと足柄平野』

柏木善治 2003「横穴墓の線刻画について」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記 念論文集 纂集堂

柏木善治 2005「神奈川県における前方後円墳以後と古墳の終末」『第 10 回 東北・ 関東前方後円墳研究会大会』

柏木善治 2006「現代にみる黄泉国という感覚」『東風史筆』Report Vol.6 (林 美佐 氏 共著)

柏木善治 2008「副葬大刀から見た相模の地域像」『神奈川考古』 44 神奈川考古同人 会

柏木善治 2009「葬送に見る横穴墓の機能と構造変化」『古代』第 122 号 柏木善治 2010「古墳時代後期~終末期の横穴墓と古墳」『横穴墓と古墳』第 15 回東 北 · 関東前方後円墳研究会

神奈川県考古学会 2004『平成 16 年度考古学入門講座 神奈川の横穴墓』

川崎市市民ミュージアム 2006『古墳の出現とその展開』

古墳 pj1995 ~ 2003「横穴墓の研究 (1) ~ (9)」『神奈川の考古学』第 5 集~『研究紀要』 8 (財) かながわ考古学財団

(財)かながわ考古学財団 2006「低地遺跡の考古学」『平成 18 年度発掘調査成果発表会・公開セミナー発表要旨』

(財)かながわ考古学財団 2010「古墳時代の遺跡」『掘り進められた神奈川の遺跡』 有隣堂

逗子市・葉山町教育委員会 2002『シンポジウム前期古墳を考える~長柄・桜山の地から~』

霜出俊浩 2010「秦野市神奈川県指定史跡二子塚古墳」『第 34 回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』

須藤智夫 2007「古墳時代後期における南武蔵の一様相-古墳・横穴墓と氏族の動向 -」『神奈川考古』第 43 号

田村良照 2002「南武蔵南部の横穴墓-横浜・川崎市域-」『考古論叢神奈河』第 10 集神奈川県考古学会

田村良照 2004「相模の横穴墓」『考古論叢神奈河』第 12 集

田村良照 2006「小田原市羽根尾横穴墓群-調査成果と問題点-」『考古論叢神奈河』 第 15 集 神奈川県考古学会

田村良照 2010「東国最古の横穴墓を追って」『神奈川考古』第46号

立花実 2005「神奈川県西部地域における古墳の成立過程」『東海史学』第39号

近野正幸 2005「西湘南における横穴系埋葬構造の一様相」『考古学の諸相』 II 坂 詰秀一先生古稀記念論文集

西川修一 2002「南関東における古墳出現過程の評価」『月刊文化財』11 月号 文化 庁

西川修一編 2004 『神奈川県厚木市吾妻坂古墳 出土資料調査報告』厚木市教育委員会 馬事文化財団 馬の博物館 2005 『はにわうま Haniwa figure of horse』

服部みはる 2005 「朱の使用をめぐって〜関東の古墳出現期を中心に〜」 『西相模考古』 第 14 号

広瀬和雄・池上悟編 2007「武蔵と相模の古墳」『季刊考古学』別冊 15

広瀬和雄・太田博之編 2010『前方後円墳の終焉』雄山閣

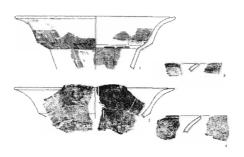
北條芳隆 2005「前方後円墳出現期託された幻想としての『日本文化』成立過程」『東海史学』第 39 号

横浜市歴史博物館 2001 『横浜の古墳と副葬品』・2004 『ヤマトとアヅマ 武具からみるヤマト王権と東国』

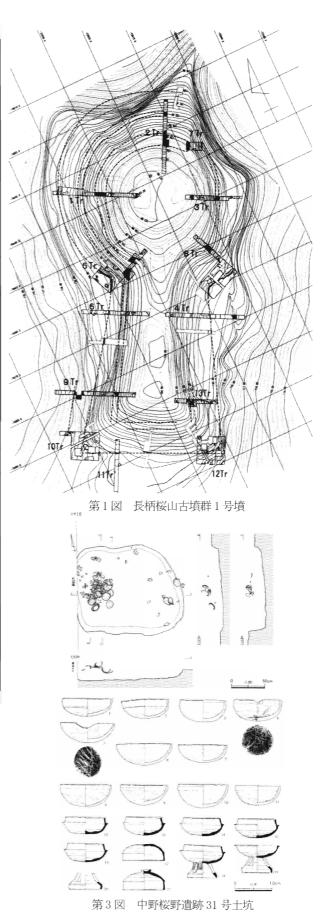
横浜市歴史博物館 2010『古墳時代の生活革命―5世紀後半・矢崎山遺跡―』

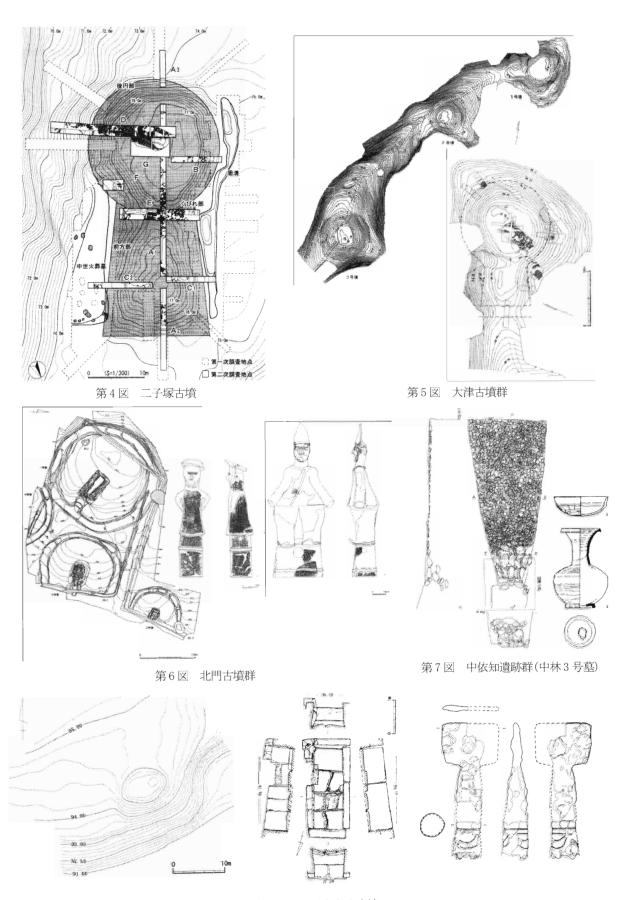
渡辺外 2009「南関東地方における弥生・古墳時代の木製農具」『神奈川考古』第 45 号 神奈川考古同人会

| | 表 日本考古学年報に記載された遺跡 | |
|------|---------------------------------------|----------|
| | ◇・伊勢原 埒免古墳 | |
| | ◇·厚木 中依知遺跡群 | |
| | (桜樹古墳群・中林横穴墓群) | |
| | ◇・寒川 宮山・中里遺跡 | l |
| | | |
| 2001 | ◇・中井 比奈窪中屋敷横穴墓群 | 年報 |
| 2001 | ◇・藤沢 新林右横穴墓群 | 54 |
| | ◇・鎌倉 亀井砦跡 (横穴墓) | - |
| | ◇・横浜 白幡浦島丘遺跡 | |
| | ◇·藤沢 用田島居前遺跡 | |
| | ▽・小田原 小田原城二の九井州入跡男 V 地点 | |
| | ◇・茅ヶ崎/寒川 小出川河川改修関連遺跡 | |
| | ◇・厚木 飯山久保古墳群(上久保1~3号墳) | |
| | ○・海老名 秋葉山古墳群 | |
| | ◇・茅ヶ崎 大久保 C 遺跡 (横穴墓) ◇・横須賀 田戸台横穴墓群 | 年報 |
| 2002 | ◇・横須賀 田戸台構穴墓群 | 55 |
| | ◆・横須賀 腰越東横穴墓 | |
| | ◇・横浜 大北横穴墓 | |
| | ○ · 海老名 社家宇治山遺跡 | |
| 2003 | ○ ・横須賀 佐島大楠中学校内横穴 | 年報 |
| 2003 | ◇・横須賀 たあろ帽エ子仪内横八 ◇・横須賀 かろうと山古墳 | 56 |
| | | - |
| | 〇・平塚 湘南新道関連遺跡 (坪ノ内遺跡) | |
| | 〇・小田原 三ツ俣遺跡 X X I 地点 | |
| | /千代南原遺跡 X IX 地点 | |
| | △・伊勢原 三ノ宮・上木津根遺跡 | |
| | ◇・横浜 北門古墳群 | |
| 2004 | ◇・寒川 宮山中里遺跡 | 年報 |
| 2004 | ◇・横浜 横浜市№.36遺跡(横穴墓) | 57 |
| | ◇・横須賀 高尾横穴 <u>墓</u> 群 | |
| | ○・川崎 小台遺跡 | 1 |
| | ○ · 小田原 千代南原遺跡 X VI 地点 | |
| | △·海老名 中野桜野遺跡 | |
| | ○·伊勢原 石田峯遺跡 | |
| | ◇ · 寒川 岡田西河内遺跡第3次調査(古墳) | 年報 |
| 2005 | ○ · 小田原 高田南原遺跡・No.273 | 58 |
| | | 36 |
| | ◇・横須賀 大津古墳群 | |
| | ◇・厚木 小野公所遺跡第3地点(古墳) | 年報 |
| 2006 | ◇・寒川 岡田西河内遺跡第4次調査(古墳) ◇・座間 梵天山横穴墓 | 59 |
| | | |
| | 〇・逗子/葉山 長柄桜山古墳群 | |
| | ○・海老名 社家宇治山遺跡 | |
| | 〇・平塚 塚越古墳 | |
| | ◇・横須賀 乗越遺跡/掘ノ内横穴墓群 | |
| | ◇・横須賀 乗越遺跡/掘ノ内横穴墓群 ◇・海老名 上今泉横穴墓群 | /r= ±0 |
| 2007 | ○◇・海老名 河原口坊中遺跡 (小石室含) | 年報 |
| | △△・三浦 白須書は / 白須而書は | 60 |
| | ○ · 伊勢原 西富岡 · 向畑遺跡 | |
| | 〇·藤沢 御幣山遺跡 | |
| | ◇・横浜 山下居留地遺跡 | |
| | ◇・欠野 二子塚古墳 | \vdash |
| 2008 | ▽ : ** 対 | 年報 |
| 2000 | 〇・平塚 塚越遺跡 | 61 |
| | 〇・伊勢原 三ノ宮・下木津根遺跡 | |
| | ○=前期、△=中期、◇=後期・終末期 | |



第2図 小田原城八幡山遺構群 出土壺形埴輪





第8図 かろうと山古墳

奈良・平安時代の動向

1 はじめに

1970~80年代、奈良・平安時代の遺跡研究については集落分析と土器編年が主であった。しかしながら奈良・平安時代集落の調査事例が増加し、その様相が明らかになるにつれ、一般的な集落遺跡なのか官衙等の特殊な性格を持つ遺構群なのか、判断のつかない遺跡について注目されるようになった。

1990年代には古代の集落研究は停滞久しいとさえ言われたが、このような一般集落と官衙のはざまのような遺跡の検討にはじまり、1990年代後半からは相模国府や古代寺院、郡衙に関する展示やシンポジウムが相次いだ。全国的な研究の進展とともに、特に近年は神奈川県内でも官衙や寺院等公的な要素を持つ遺跡についての新知見が増え、この10年はこれまでの地道な調査・研究を裏付ける大きな発見が相次いだ。

2 相模国府周辺

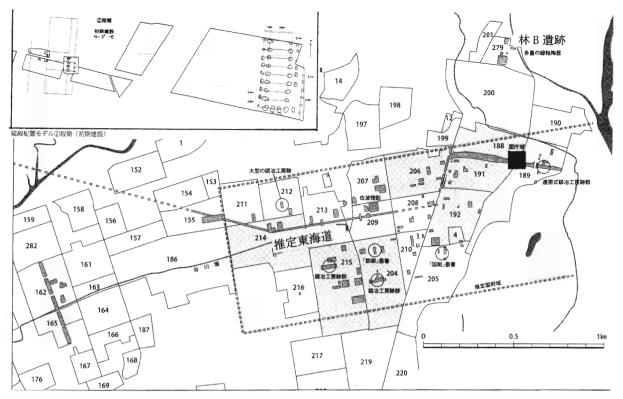
海老名国府説に終止符

相模の国府が大住郡、現在の平塚市に所在することは、「曹師」や「国厨」の墨書土器、緑釉陶器の量の多さ、竪穴住居跡の数、掘立柱建物跡の集中等から間違いないことであった。ただし、初期段階から平塚に国府が置かれていたのか、という点については意見の分かれるところで、相模国分寺が海老名市にあることから、初期国府は国分寺と同じ海老名にあった、とする考えも根強かった。しかし2004、2005年に平塚市湘南新道関連遺跡で大型掘立柱建物跡2棟が対となって発見され、遺構の全容は明らかではないものの、その規模や形状、配置から、国庁脇殿であろうことは異論のないところとなった。この大型掘立柱建物跡は、3期の変遷が考えられ、出土遺物や他の遺構との前後関係から、8世紀初頭には建てられていたことが判明した。ここに国府は当初より平塚におかれ、海老名に初期国府があった可能性はなくなった。

しかし、大型掘立柱建物跡の存続期間は長くても9世紀初頭までであることから、 その後の国庁がどうなるかは課題である。明石氏らは古代寺院として考えられていた 四ノ宮下郷廃寺の遺構の再検討により、国司館の可能性を指摘し、国庁の機能も担っ た可能性を指摘している。

国府のまちの景観

平塚市域では他にも古代遺構が多く発見されているが、東海道の可能性が高い道路 遺構が複数遺跡で発見され、国府域の東西を官道が貫くことが明らかとなった。掘立 柱建物群、連房式鍛冶工房をはじめとする工房跡、特殊な遺物の出土状況等から、官 道の南北にブロック状に官衙関連施設の存在が想定され、国府のまちの骨格が見える



第1図 相模国府域と国庁脇殿(推定)跡((財)かながわ考古学財団2010 ふるさと歴史シンポジウム実行委員会2006)

ようになった。国府域は概ねの範囲が想定されているが、溝や道等でその範囲を区画するものではなく、緩やかな規範の基に成り立っているようである。都城の縮小版のような画一的な方画地割はないが、官道を中心に主要施設を配置する景観が想定できるようになってきた。

緑釉陶器と国司

一方、国府域の出土遺物の分析からも興味深い発見があった。相模国府では、施釉陶器が大量に出土しており、特に緑釉陶器は神奈川県下出土点数のうち約7割が相模国府関連遺跡に集中することが指摘されている。湘南新道関連遺跡の調査で出土した緑釉陶器の分析結果から、その時期と産地について、9世紀第2四半期の京都産に始まり、9世紀第3、4四半期には東海地方を産地とするものが大半を占めることが判明した。この時期は嵯峨天皇の皇子、皇孫11人が相模国府の国司として任命された時期に重なり、緑釉陶器の生産地も少なからず嵯峨院との関係が指摘されている。嵯峨源氏系の関連者が相模国に赴任し、緑釉陶器も彼らに関連して搬入されたことが推察されている。都の貴族たちは田舎っぽい食器を好まなかったのだろう。

また緑釉陶器の搬入に関しては、81個体の緑釉陶器が一括出土した、林B遺跡を 津関連の遺跡として評価する考えもある。

3 郡衙と郡寺

現在の神奈川県域は相模国と武蔵国の一部に相当する。相模国は足上、足下、余綾、大住、高座、愛甲、鎌倉、御浦の8郡、武蔵国は21郡のうち都筑、久良、橘樹郡が

現在の神奈川県域である。このうち、郡衙関連遺構が確認されているのは、相模国鎌 倉郡、高座郡、武蔵国都筑郡、橘樹郡である。

高座郡衙跡と下寺尾寺院跡

1997年、田尾氏により相模国における郡の基本的な構成要素として郡衙と寺院に津を加えたモデルが提唱された。これをなぞるかのように明らかになってきたのが高座郡の事例である。2002年に茅ヶ崎市の県立北陵高校の校内で郡庁、正倉、館等の建物群が発見され、その南西に位置する下寺尾寺院跡では、この10年の精力的な調査により主要伽藍域が明らかになってきた。さらに隣接する小出川河川改修事業等に伴う発掘調査で、小出川、駒寄川の人為的な整備をうかがわせる旧河道の発見や、祭祀関連遺物の出土もあり、「川津」の存在の蓋然性が高まった。

発掘調査成果から、郡衙遺構は7世紀第4四半期から8世紀第2四半期ごろまでと存続期間は短かったものとみられている。郡庁は当初、正殿と脇殿で構成され、推定東西長66.3mと規模の大きなものであったが、長くは維持されず、正殿と塀の簡素なものとなった後、8世紀第1四半期には取り壊され、代わって館が建てられたとみられている。

下寺尾寺院跡も郡衙とほぼ同時期に造営され、9世紀代に改修・再建され11世紀初めまで存続する。瓦が出土し、礎石が確認されながら、長らく寺院建物跡の位置や配置は不明であったが、発掘調査により伽藍区画を示すものとして、創建期段階の大型柱穴列、改修・再建期の区画溝が認められ、2008年にはとうとう区画内に掘り込み事業を伴う建物跡が確認された。その後も創建期のものと見られる大型掘立柱建物や、再建期の礎石建物の根石とみられる集石列が確認されている。詳細な建物配置は今後の報告が待たれるところである。寺院跡周辺も含め、出土する瓦は大きくは桶巻づくりの国分寺創建以前のものと、国分寺再改修・建期のものに分かれる。軒瓦は極めて少量ではあるが再建期段階のものは国分寺と同氾の軒丸瓦、鬼瓦もみられる。

寺院跡の年代については、小出川河川改修事業に伴う周辺の遺構の様相をみると8世紀半ば~9世紀初頭にかけての竪穴建物が希薄になる。郡衙遺構の廃絶期に重なると同時に、下寺尾寺院跡についても創建期と改修・再建期までの時期に空白期があるように思われる。

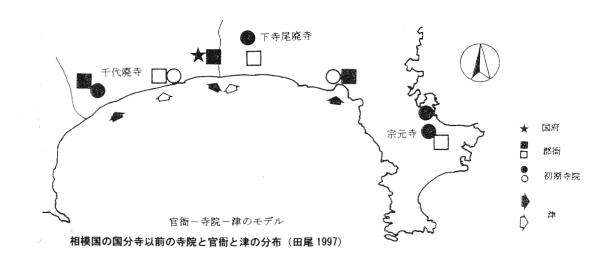
橘樹郡衙跡

武蔵国域では川崎市高津区の千年伊勢山台遺跡の調査で橘樹郡衙の様相が明らかになってきた。遺跡と同じ丘陵上の西側には白鳳後期の創建とされる影向寺が所在し、郡衙と寺のセットとなっている。

千年伊勢山台中央地区、東地区からは総柱建物跡 21 棟等、掘立柱建物跡 38 棟が確認され、正倉域であることが判明した。このほかやや距離が離れた蓮乗院北遺跡でも総柱の倉庫と思われる建物跡が発見されており注目される。明確な郡庁の遺構は発見されていないが、千年伊勢山台西地区で郡庁の可能性がある側柱建物跡が確認されている。遺構の時期は3~4期に分けられ、その成立は7世紀末から8世紀初頭とされ、

9世紀前半代までの存続と推測されている。

橘樹郡衙跡の一部は千年伊勢山台官衙遺跡として市の重要史跡として保存されることになった。高座郡衙と下寺尾寺院跡についても、相模国の古代の様相を解明するう



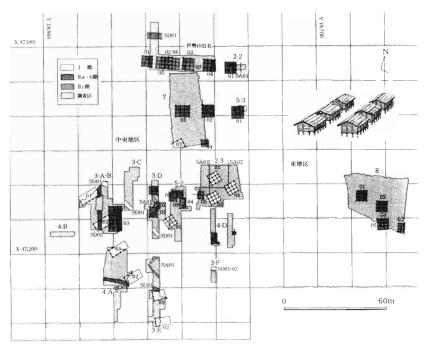
| 国 | 郡 | 郡衙 | 寺院 | 津 |
|----|----|----------|-------------|-----------------------|
| | 足下 | 下曽我遺跡? | 千代寺院跡 | (森戸川?) |
| 相模 | 高座 | 下寺尾西方A遺跡 | 下寺尾七堂伽藍跡 | 下寺尾七堂伽藍跡 (駒寄川・小出川) |
| | 鎌倉 | 今小路西遺跡 | 千葉地 (東) 遺跡? | |
| | 御浦 | | 宗元寺跡? | |
| 武蔵 | 都筑 | 長者原遺跡 | | |
| | 橘樹 | 千年伊勢山台遺跡 | 影向寺跡 | |

神奈川県内の郡衙・寺院等関連遺跡



下寺尾遺跡群の景観復元図(絵:霜出彩野) (茅ヶ崎市教育委員会 1997)

第2図 神奈川県内の郡衙と高座郡衙



第3図 千年伊勢山台 中央・東地区郡衙関連遺構配置図 (川崎市教育委員会2007)

えで大きな役割を果たしているとともに、郡の中心的な施設がセットで残る極めて良好な事例である。各施設が一体として保存され、整備・活用できるよう前進を期待したい。

4 相模国分寺跡と乗越遺跡

相模国分寺の主要伽藍

相模国分寺跡は 1990 年代から史跡地内外で断続的な調査が行われてきた。これにより、1965 \sim 1967 年の第 1 次調査では不明であった主要建物の様相や、新たな建物跡、伽藍敷地を区画する溝が確認されている。

主要伽藍は西に塔、東に金堂、塔と金堂の北側に講堂を配し、塔、金堂等を廊・築地で囲む法隆寺式伽藍配置をとる。伽藍地は溝と一部は逆川運河で画されたものとみられ、東西 220~240 m、南北300 m以上とみられる。各遺構の規模等は別に示すとおりであるが、塔跡が壇上積基壇外装であるのに対し(後に北辺のみ川原石による乱石積基壇に改修)、金堂、講堂の基壇端部が垂直ではなく、斜度を持った盛土に川原石を貼りつける葺石状基壇とでもいうべき特異な外装であることが判明した。金堂の基壇内からは瓦が多数出土しており、塔基壇内に認められない点から、塔の造営が金堂造営以前であった可能性が示唆されている。

このほか近年新たに見つかった遺構としては、僧坊の約50m北側の、東西方向に主軸を持つ大型建物跡が挙げられる。掘方の大きさや土層状況から壺地業による建物跡とみられるが、掘方の大きさ、柱間寸法も異例の規模であり、出土遺物による時期の特定もできないことから、現段階ではどのような役割を担った施設であったのか謎である。

乗越瓦窯発見!!

相模国分寺跡に関連しては、創建に関しての手がかりを得る大きな発見があった。

横須賀市秋谷での乗越遺跡の調査である。乗越遺跡周辺では、相模国分寺創建期の瓦の一部と同じ瓦が散布することが知られていたが、その実態は長らく不明であった。2007年、宅地造成をきっかけとして登り窯(地下式有階有段登り窯)跡5基、平窯(地下式ロストル式平窯)跡3基の瓦窯跡群が発見、調査された。登り窯跡は焚口が谷側(南)を向く2~4号窯跡、海側(西)に向く5、6号窯跡に分けられるが、窯体や煙出し施設といった構造は基本的に共通しており、岩盤を掘りぬいた非常に堅固なものである。平窯跡も構造は共通しており、焚口を谷側(南)に向け、3基等間隔で造られ、8号窯の西側には、もう1基の存在も想定されている。調査者である中三川氏は、登り窯と平窯という窯構造の違いは時間差というよりは製品の種類、生産にかかわる工人の系譜の差異などによる可能性が高いと指摘しているが、相模国分寺跡のもう一つの主要供給瓦窯である瓦尾根瓦窯跡ではロストル式平窯を採用しており、興味深い。

出土瓦については、詳細な報告が待たれるところではあるが、平瓦、丸瓦を主体とする中、出土品整理途上で国分寺の創建期の軒丸瓦である珠文縁単弁五葉蓮華文軒丸瓦の破片も含まれていたことが判明している。瓦にはこれまで相模国分寺創建期の公郷系と区別していたタイプも含まれるとみられ、相模国分寺跡出土瓦で三浦半島系としていたものが、全て乗越瓦窯跡で生産されていた瓦である可能性が高く、相模国分寺跡創建にかかる専用窯として位置付けられる。

もう一点注目すべきこととしては、5、6号窯跡で瓦窯を転用し須恵器焼成が行われている点である。須恵器は坏、椀、盤、蓋であり、儀式用の特注品を思わせるものである。須恵器の焼成は乗越瓦窯群での瓦生産と並行して行われているため、国分寺での儀式用とも思われるが、残念ながら相模国分寺跡周辺での出土事例はまだない。

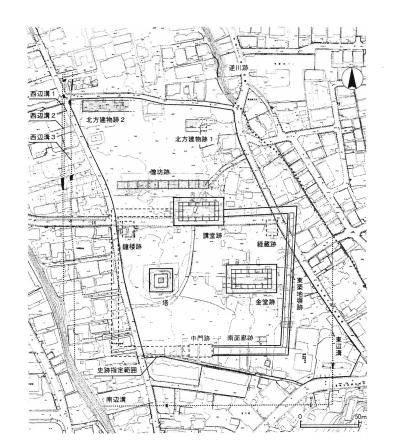
乗越遺跡は入り江に面しており、相模国分寺までの瓦運搬には舟が使用されたことに異論はないであろう。相模湾から相模川をさかのぼり、目久尻川を経由し運河である逆川に入り、国分寺跡のすぐそばで荷卸しをした…そんな古代の景観を彷彿とさせる遺跡である。惜しくも宅地造成で削られてしまった部分もあるが、残る窯跡について保存されることを切に願っている。

5 新たな課題

国府、官衙、国分寺関連と公的な施設を中心に近年の調査・研究成果を振り返ったが、新たな知見は新たな課題への入り口でもある。

相模国府については湘南新道関連遺跡での大型掘立柱建物跡の発見により、長年の 相模国府三遷説には終止符が打たれたが、国庁正殿をはじめ、関連遺構の有無や、配 置は不明である。そして9世紀以降の国庁の変遷や、改めて、なぜ相模国分寺を国 府から離れた高座郡に置かれたのかという問題も浮上してくる。

郡衙と郡寺について、高座郡がモデルケースのような発見であったが、他郡におい



相模国分寺跡 諸元 建物:礎石建,3間四方(36尺,10.73m) 遊跡 基壇:高さ4.5尺(1.34m),69尺(20.56m)四方 建物:礎石建,桁行7間(116尺,34.5m),梁行4 金堂跡 閒(56尺, 16.7m) 基壇:高さ3.5尺(1m),桁側134尺(40m),梁側 講堂跡 104尺(31m) 建物:掘立柱建(Ⅰ・Ⅱ期),礎石建(Ⅲ期) 僧坊騎 桁行 25 間以上:81m以上, 梁行 2 間:6.5m 1坊:3間(30尺, 8.9m)×2間(22尺6.5m) 経藏跡 地業範囲(推定) 桁側約 15m,梁側約 11.4m 鐘楼跡 中門跡 地業範囲 桁側 20~21.5m, 桁側 10~10.7m 北面廊跡 礎石建, 桁行 22 尺 (6.6m) 等間 南面廊跡 礎石建, 桁行 10 尺 (3.0m) 等間, 梁行 18 尺 (5.4m)

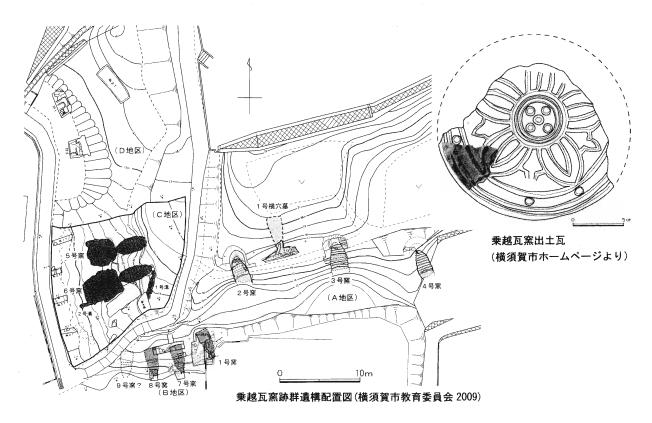
掘立柱建(坪掘地業), 桁行3間以上(30尺,9m以

史跡指定 大正 10(1921)年 3 月 3 日付内務省告示第 38 号種別:史跡 指定面積:34472.73 ㎡



建物跡 2 上), 梁行 2間(20 尺, 6.0m)

相模国分寺伽藍配置図、軒先瓦意匠(海老名市教育委員会 2009)



第4図 神奈川県内の郡衙と乗越瓦窯跡

ても同様に展開するのであろうか。また武蔵国橘樹郡衙のような丘陵と谷との高低差 がある場所において「津」はあるのか。

郡衙の消長も気になるところである。高座郡衙の8世紀半ば以降の動向、橘樹郡衙も9世紀中葉以降の展開が不明である。相模国鎌倉郡衙である今小路西遺跡において

も8世紀代半ば以降に空白期があるようであり、武蔵国都筑郡衙に比定される長者原遺跡も詳細は不明であるが7世紀末頃の成立後、継続的な様相は見えない。各郡単位での事情なのか、国レベルあるいは社会的な転機があったのだろうか。

これまでの調査成果をさらに精査し、違う視点から検討することで、新たな知見を 得ることもできるはずである。来る二十年にはさらなるストーリーが明らかになるこ とを確信している。

引用・参考文献

明石新 2004「奈良・平安時代-神奈川の古代官衙の現状と課題-」『考古学セミナール神奈川の考古学この 10 年』 (財)

かながわ考古学財団

明石新 2011「相模国府-推定から確定!そして課題へ!-」『東国古代遺跡研究会 第1回研究大会 関東甲信越地域の国衙と郡衙』東国古代遺跡研究会

明石新・若林勝司 2000「平塚市四之宮所在の『下郷廃寺』の再検討」『神奈河考古学論叢第8集』神奈川県考古学会

大上周三 1993「奈良・平安時代集落研究の到達点とその展望」『神奈川県の考古学の問題点とその展望 埋蔵文化財センター開所 10 周年記念』かながわの考古学第 3集 神奈川県立埋蔵文化財センター

海老名市教育委員会文化財課·国士舘大学考古学研究室 2005『相模国分寺跡発掘 調査説明会資料』

海老名市教育委員会 2009『史跡相模国分寺跡・史跡相模国分尼寺跡』えびな文化 財探究書其ノ壱

脚かながわ考古学財団 1999『公開セミナー古代の大型建物跡-役所か邸宅かー記録集』

関かながわ考古学財団 2003『平成14年度の発掘調査成果発表会 公開セミナー 高座郡衙(郡家)の世界発表要旨』

財力ながわ考古学財団 2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告242

財かながわ考古学財団 2009『湘南新道関連遺跡Ⅳ』かながわ考古学財団調査報告243

関かながわ考古学財団 2010『小出川河川改修事業関連遺跡群Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告 251

脚かながわ考古学財団 2010『公開セミナーよみがえる古代東国の鉄文化ー相模・ 武蔵の発掘調査成果から』

川崎市教育委員会 2007 『古代の川崎市役所を発掘する - 橘樹郡衙推定地の調査成果と歴史的意義 - 記録集』

須田勉 「海老名市相模国分寺跡」『第29回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

神奈川県考古学会

田尾誠敏 1997「古代相模国の官衙と寺院をめぐって」'97 かながわ考古トピックス

茅ヶ崎市教育委員会 2005『神奈川県茅ケ崎市下寺尾七堂伽藍跡の調査 第8次確 認調査の概要』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告24

茅ヶ崎市教育委員会 1997『下寺尾寺院跡の研究』茅ヶ崎市文化財資料集第 12 集 茅ヶ崎市教育委員会 2009『第 20 回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨』

平塚市博物館 2010『平成21年度春季特別展 検証相模国府 - 古代都市復元への挑戦 - 』

ふるさと歴史シンポジウム実行委員会 2006『復元!古代都市平塚〜相模国府を探る〜』平塚市教育委員会

横須賀市教育委員会 2009「10. 乗越遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報集XⅦ』横須賀市文化財調査報告書第 46 集

依田亮一 1998「神奈川県出土緑釉陶器の諸様相-器種・産地別分類と年代的位置 付けの再検討-」『神奈川考古第34号』神奈川考古同人会 近世の動向

山口 剛志

はじめに

東国における近世の幕開けは、天正 18年(1590)豊臣秀吉による小田原攻めによって戦国大名小田原北条氏が滅亡した以降とするのが一般的である(永原 1990)。ここでは、この時期区分に準拠して神奈川における近世考古学の動向を振り返ることにする。以下、小田原城の遺跡と神奈川の近世遺跡とに大別して検討してみたい。

1. 小田原城

小田原城は、昭和13年(1938)に国指定史跡となって以降、現在までに本丸、二の丸の大部分と三の丸・総構の一部が国指定史跡となっている。小田原城の調査は、昭和46年(1971)に史跡整備を目的とした調査(小田原市教育委員会1972)が本丸・二の丸で行われたのが最初であり、これ以降、現在までに大小あわせて200地点以上で調査が実施されている。

(1) 本丸・二の丸

本丸・二の丸の調査は、二の丸弁財天曲輪(金子 1980 a)や御用米曲輪(塚田ほか 1984)などの一部を除けば、その多くは史跡整備に伴うものである。昭和 58 年 (1983)から小田原城の史跡整備が本格的に進められたことに伴い、本丸・二の丸の調査は増加した。これまでに二の丸中堀(住吉堀)(大島 1993 ~ 95)、二の丸御殿(大島 1999)、馬屋曲輪(大島 2003 など)、馬出門(諏訪間ほか 2010)など、史跡整備に伴う調査が実施された。その成果を基に、銅門・中堀(住吉堀)・馬出門が近世の姿に復元され、平成 22 年度には馬屋曲輪の修景整備が完成予定である。

(2) 三の丸

近世の三の丸は、主として低地部に展開しており、藩の家老屋敷や役所などが置かれたところで、昭和53年(1978)に箱根口跡第 I 地点(塚田ほか1995)で最初の調査が行われた。これ以降、小規模な調査が多く実施されたが、平成5~6年(1993~94)調査の藩校集成館跡第Ⅲ・IV地点(小林2002)や、平成17~19年(2005~07)調査の杉浦平太夫邸跡第IV地点・大久保弥六郎邸跡第Ⅲ地点(小山ほか2008)においては5,000 ㎡以上の大規模な調査が実施され、近世の武家屋敷を構成する遺構群が明らかにされている。

また、この2箇所の調査では、18世紀前半の盛期鍋島が出土した。鍋島焼は、肥前鍋島藩が将軍家・大名家などへの献上・贈答品として精巧な磁器を藩直営で焼いたもので、江戸を除くと長崎・小田原からの出土例が多い。これは、幕府の重職を代々勤めた大久保氏が藩主であったことと関連すると考えられ、鍋島藩から陶器などが贈

られた記録もある(神奈川県立博物館 1987)。考古資料が文献史料によって裏付けられた事例として注目される。

(3) 三の丸堀

三の丸堀では、大手門に面した三の丸東堀第 II 地点(小林ほか 1995)が注目される(第1図)。平成3~4年(1991~92)に調査され、17世紀中葉の近世化工事によって構築された切石石垣の下から16世紀末~17世紀初頭と推定される玉石石垣が検出された。玉石石垣は、河原石による野面積みで総数9段積まれており、屈曲部には算木積みの技法が採用されていた。この玉石石垣については、現在最古の城絵図である『相州小田原古絵図』(「加藤図」1614~31年頃)と年代や屈曲する形態がほぼ一致していることも判明した。

なお、三の丸東堀以外では、三の丸南堀第V~WI地点(佐々木ほか 2002・2005)で 17 世紀中葉の近世化工事によって構築された切石石垣が検出された。一方、三の丸北堀・元蔵堀では、現在石垣が確認されておらず、16 世紀以来の障子堀の形態を呈している(小林 2005)。

(4) 総構

総構は、天正 18 年(1590)豊臣秀吉による小田原攻めに備えて構築され、城内はもとより城下をも堀と土塁によって取り込んだ周囲約 9 kmにも及ぶ大遺構である。平成 13 年(2001)調査の伝肇寺西第 I 地点(山口ほか 2004)では、堀幅 16.5 m、深さ 10.0 mという大規模な障子堀が確認され、総構の堀と土塁の全容が初めて明らかにされた(写真 1)。

(5) 城下

城下では、昭和 51 年(1976) 香沼屋敷跡第 I 地点(金子 1980 b)が最初の調査である。転機となったのは昭和 62 年(1987)調査の欄干橋町遺跡第 II 地点(諏訪間ほか 1993)であり、検出された遺構・遺物から $16 \sim 18$ 世紀の遺物が 5 時期に変遷することが確認された。この基準資料の確立により、小田原城における陶磁器編年の構築が可能となった。

欄干橋町遺跡第IV地点(山口ほか 1998)は、平成6年(1994)に調査された。 東海道に面した表側に屋敷、奥側にゴミ処理用の土坑が構築された庭であったことが 推定されており、東海道沿いの城下の土地利用形態が明らかにされた。

さらに、平成8年(1997)調査の欄干橋町遺跡第V地点(諏訪間ほか1999)では、18世紀末~19世紀中葉の廃棄と推定されるガラス製簪・笄の破片が77点出土した。調査地は、天保3年(1832)以降が竹本屋幸右衛門の旅籠で、飯盛女を置いて大いに繁盛していた。飯盛女とは、旅籠で宿泊客の食膳接待をする仲居であるが、娼婦としても働いていた。多量に出土した簪・笄は、飯盛女が置かれた時期と重なることから、飯盛女が使用していた髪飾りと推定された。

中宿町遺跡第II 地点(青木ほか 1994)は、平成5年(1993)に調査された。17世紀中葉より古い遺構の主軸が東西-南北方向であるのに対し、17世紀中葉以降の

主軸は南北軸から少し西に振れて東海道や三の丸南堀に直交するように変更している ことが明らかにされた。この変更は、城下の近世化工事の際に中宿町の屋敷割が東海 道を基準とした結果であると推定された。

筋違橋町遺跡第Ⅲ地点(齋木ほか 2005)は、平成 14 年 (2002) に調査され、17世紀前葉の東海道と推定される道路硬化面が検出された。道路は、幅 5.6 m以上を測り、厚さ 90cm の範囲に少なくとも六枚の砂利を硬く叩き締めた層が確認された。また、道路北側には、幅 1.8 m、深さ 1.5 mの石組水路が伴っていた。小田原城下で検出された初の近世東海道である。

また、平成 20~21年 (2008~09) 調査の筋違橋町遺跡第V地点 (渡辺 2010)でも、第Ⅲ地点から延びると推定される両側に石組水路を伴う東海道の道路硬化面が確認された。さらに、その上層では、小田原用水から木樋で水を引き込み、竹樋で分水した上水関連施設が検出された (写真 2)。城下における用水の具体的な構造を明らかにできたことは、大きな成果といえる。

3. 神奈川の近世遺跡

(1) 宿場町

厚木市東町二番遺跡(平本ほか 1995・1996)は、近世に大山詣で賑わった旧矢 倉沢往還沿いの厚木宿に位置し、調査地は近世の豪商の屋敷跡にあたる。平成3年 (1991) に調査され、16世紀の中世から近・現代までの屋敷の変遷や、街道沿いの 表側に店、奥側に土蔵という土地利用形態が明らかにされた。

東海道の宿場である藤沢宿では、平成 19~20年 (2007~08) に藤沢宿遺跡 (宮田 2008) が調査された。調査地は東海道に面しており、文久3年 (1863) には呉服商である「田むらや安兵衛」の敷地にあたる。近世 (18世紀) ~近代の遺構が検出され、火災の痕跡と推定される焼土面も2時期以上確認された。

(2) 村落跡

綾瀬市宮久保遺跡(國平ほか 1988)は、昭和 56~59年(1981~84)に調査された。オモヤ・ナヤなどの掘立柱建物跡群と段切りを基本として、井戸・土坑・竪穴状遺構・柱穴などが伴う屋敷跡と推定される 9 箇所の遺構群が検出され、17世紀後半~19世紀前半の村落の変遷が明らかにされた。この成果は、その後の村落跡の調査に大きな指針を与えた。

その後、清川村宮ヶ瀬遺跡群北原(No. 9)遺跡(市川ほか 1993)・表の屋敷遺跡(近野ほか 1997)や、逗子市池子遺跡群No. 7地点(山本ほか 1997)などからも近世村落が検出された。

(3) 寺院跡

平成2~3年(1990~91)調査の清川村宮ヶ瀬遺跡群北原(№9)遺跡内長福寺址(市川ほか1993)では、4面の遺構面からなる近世の寺院跡が検出された。第1面から検出された遺構を基にして18世紀後半~19世紀の伽藍配置が復元され、第2面直

下からは梵鐘鋳造遺構が検出された。この遺構は、出土した 18 世紀前半の陶磁器から『新編相模風土記稿』にある元文 5 年(1740)銘の梵鐘を鋳造した可能性が高いと推定された。近世に属する梵鐘鋳造遺構の検出は、全国的にも非常に珍しい。

(4) 生産遺跡

まず、炭を生産するための炭焼窯は、清川村宮ヶ瀬遺跡群にある昭和62~63年(1987~88)調査のナラサス北遺跡(上田ほか1991)で36基、同じく平成元~2年(1989~90)調査の北原(№9)遺跡(市川ほか1993)で15基検出された。いずれも、斜面地をトンネル状に掘った横穴式土窯の形態である。炭は、重要な燃料として庶民の生活必需品であったが、このように多数の炭焼窯の存在は、山間部の村落で炭を商品とした経済活動が行われていたことを窺わせる。

次に、酒造関連遺構と推定される
竈跡は、平成2~3年(1990~91)調査の清川村宮ヶ瀬遺跡群馬場(№ 6)遺跡(鈴木ほか1995)で検出された。長さ2.8 m、幅1.8 mを測り、18世紀後半~19世紀代の竈跡と考えられる。また、平成12年(2000)調査の相模原市根小屋根本遺跡(池田ほか2004)でも長さ4.3 m、幅3.6 mを測る大形竈が検出された。18世紀後半以降と推定され、円形の竈(燃焼室)に方形の焚口を伴う半地下式の形態で、周辺から検出された特殊竪穴・井戸・土蔵造り建物跡・礎石建物跡とともに酒蔵を構成していた可能性が指摘されている。

中・近世の水田跡としては、平成7年(1995)調査の海老名市四大縄遺跡(齋木ほか1997・1998)がある。水田跡は、第1~3・4A・4B面の総数5面が検出され、東西道路(大畦畔)によって形成された大区画の中に畦畔で区割された水田跡が細かく分布し、第2面では田植時の横歩きした足跡と推定される窪みも検出された。水田跡の時期は、第1面が18世紀~大正末、第2面が17世紀、第3面が中世後期~近世初頭と推定されている。

石垣を切り出した石丁場としては、平成 17 ~ 18 年 (2005 ~ 06) 調査の小田原市早川石丁場群関白沢支群がある (三瓶ほか 2007)。急斜面にある大きな安山岩の転石を割って江戸城修築のための石垣を切り出したもので、17 世紀前葉の時期に行われたと考えられる。石材にクサビを差し込むための穴である矢穴が認められる石材、割られた状態の石材のほか、直方体に加工された石材などが検出され、石垣を切り出す製作工程が明らかにされた (第2図)。また、石材には円に「十」や「寸」の刻印が刻まれており、石垣を搬出するための石曳道も検出された。

最後に、平成3~7年(1991~95)調査の茅ヶ崎市上ノ町・広町遺跡(大村ほか1997)では、非常に多くの種類の地名と人名が朱書きされた焼継の陶磁器が多量に出土した。焼継師が預かって修復した陶磁器を何らかの理由で作業場の周辺に廃棄した痕跡と推定されており、商売の活動範囲など焼継師の実像にせまる上で貴重な資料である。

(5) 墓地

墓地は、平成13年(2001)調査の横須賀市向井将監正方夫妻墓(中三川ほか

2005)がある。知行 2,000 石の旗本であった向井将監正方は延宝 2 年(1674)没、その妻は寛文 10 年 (1670) 没という埋葬人物と没年が特定できる貴重な事例である。 夫妻の墓は、輝石安山岩製の墓標の下に甕棺を木槨内に納めた木槨甕棺墓であり、この形態の出現期を示す資料として重要である。

また、平成3~5年(1991~93)調査の逗子市池子遺跡群第7地点(山本ほか1997)では、中世〜近代の墓地が調査された。15世紀代の墓坑1基のほかは、17世紀後半〜近代の墓坑51基が検出された。このうち、近世墓については、方形と長方形を呈する平面形は新しい時期ほど方形優位から長方形優位に変化、18世紀後半以降は墓坑が大形化、木棺は遅くとも19世紀代に使用、火葬は18~19世紀代に行われた可能性、などが指摘された。

平成 $3 \sim 4$ 年(1991 \sim 92)調査の秦野市東開戸遺跡(安藤 1992)では、積石塚が検出された。この積石塚は、直径約 7 m、幅約 1 m、深さ 60 cmを測る周溝が円形に巡り、その内部に高さ約 1.6 mの積石がなされ、積石下部の中央付近には小片化した焼人骨が検出された。宝永 4 年(1707)の富士山噴火に伴う宝永スコリアが周溝内に堆積していたことから、宝永 4 年(1707)以前の構築であることが判明した。 (6) 街道

街道の事例としては、昭和 55・63 年(1980・1988)調査の箱根町箱根旧街道(伊藤 1984・1990、伊藤ほか 1987)がある。このうち昭和 63 年(1988)の調査では、国指定史跡を含む 15 箇所のトレンチのうち 12 箇所から良好に遺存している石畳が検出された。

また、東海道に設けられた一里塚の事例としては、平成 10 年 (1998) 調査の箱根町箱根旧街道畑宿一里塚 (伊藤ほか 1999) がある。調査された 2 基の一里塚は、直径約 30 尺 (9 m) の塚の下部周囲に石を円形に積み、その内部に礫を充填した上で塚全体に盛土していたことが判明した。

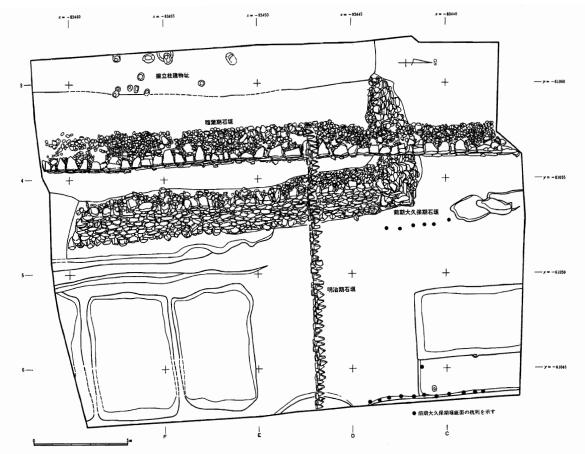
(7) 台場

江戸幕府が外国船に備えて設けた砲台である台場としては、平成 19 ~ 20 年(2007 ~ 08) 調査の横浜市神奈川台場(鈴木ほか 2008、山田 2009)がある。神奈川台場は、万延元年(1860)東京湾に造られた人工島で、調査では台場各辺の石垣や台場へ渡るための取渡り道が確認された。

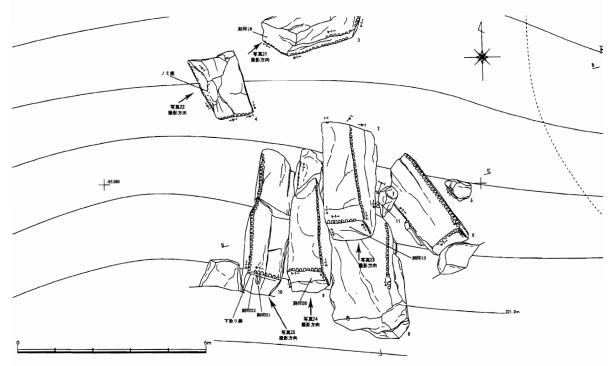
4. まとめ

以上のように、神奈川における近世遺跡の調査は、小田原城では 1970 年代後半、それ以外の地域では 1980 年代後半から急速に進展した。中でも、1980 年代後半以降は、清川村宮ヶ瀬遺跡群や逗子市池子遺跡群に代表されるような大規模開発に伴う調査によって、村落跡・寺院跡・生産遺跡・墓地などといった様々な性格の資料が蓄積され、小田原城を中心とする都市の様相だけでなく、村落の様相が次第に明らかにされてきたといえる。

文化庁が平成10年(1998)に提言した、近世遺跡は地域において必要なものを対象とすることができるという近世考古学の転機となった以降においても、石丁場・一里塚・台場などの新たな遺跡が確認されており、近世遺跡は地域に欠かせない歴史資料となってきている。今後も、調査で明らかになった近世考古資料を地域史に位置付ける努力を続けていく必要がある。



第1図 小田原城三の丸東堀第Ⅱ地点遺構全体図(1/200)(小林ほか1995)



第2図 小田原市早川石丁場群関白沢支群16区平面図(1/100)(三瓶ほか2007)

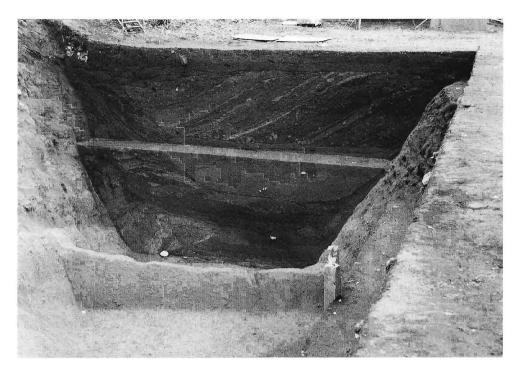


写真 1 小田原城総構伝肇寺西第 I 地点障子堀検出状況



写真 2 小田原城下筋違橋町遺跡第 V 地点上水関連施設検出状況

引用文献

青木豊ほか 1994『小田原城下中宿町遺跡第Ⅱ地点』

安藤文一 1992「秦野市東開戸遺跡の調査」『第 16 回神奈川県遺跡調査・研究発表 会発表要旨』

池田治ほか 2004『津久井城根小屋地区遺跡群』かながわ考古学財団調査報告 166 市川正史ほか 1993『宮ヶ瀬遺跡群』Ⅲ、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 21

伊藤潤 1984「箱根旧街道石畳埋蔵確認調査報告」『箱根町文化財研究紀要』第 15 号

伊藤潤 1990「箱根旧街道Ⅱ」『箱根町文化財研究紀要』第20号

伊藤潤ほか 1987「箱根旧街道」『箱根町文化財研究紀要』第18号

伊藤潤ほか 1999『箱根旧街道畑宿一里塚保存整備事業報告書』

上田薫ほか 1991 『宮ヶ瀬遺跡群』 Ⅱ、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 21 大島慎一 1993 『史跡小田原城跡二の丸中堀』 Ⅰ、小田原市文化財調査報告書第 45 集

大島慎一 1994『史跡小田原城跡二の丸中堀』 II、小田原市文化財調査報告書第 48 集

大島慎一 1995『史跡小田原城跡二の丸中堀』Ⅲ、小田原市文化財調査報告書第 57 集

大島慎一 1999 『史跡小田原城跡二の丸御殿跡試掘調査の概要』小田原市文化財調 査報告書第76集

大島慎一 2003「史跡小田原城跡馬屋曲輪」『第 27 回神奈川県遺跡調査・研究発表 会発表要旨』

大村浩司ほか 1997『上ノ町・広町遺跡』

小田原市教育委員会 1972 『第一次小田原城址発掘調査について』

神奈川県立博物館 1987『鍋島-藩窯から現代まで』

金子皓彦 1980 a 「小田原市小田原城評定所曲輪跡の調査」『第4回神奈川県遺跡 調査・研究発表会発表要旨』

金子皓彦 1980 b 『小田原城香沼屋敷』

國平健三ほか 1988 『宮久保遺跡』 Ⅱ、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 15 小林義典 2002 『小田原城三の丸藩校集成館跡第Ⅲ・第Ⅳ地点』小田原市文化財調 査報告書第 100 集

小林義典 2005『小田原城三の丸元蔵堀第Ⅷ地点』

小林義典ほか 1995『小田原城三の丸東堀第2地点発掘調査報告書』

小山裕之ほか 2008『小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡第Ⅳ地点・大久保弥六郎邸跡 第Ⅲ地点』 齋木秀雄ほか 1997『四大縄遺跡』

齋木秀雄ほか 1998『四大縄遺跡』

齋木秀雄ほか 2005『神奈川県小田原市筋違橋町遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』

佐々木健策ほか 2002『小田原城三の丸南堀第IV・V・VI地点』小田原市文化財調 査報告書第 93 集

佐々木健策ほか 2005『小田原城三の丸南堀第Ⅶ地点』小田原市文化財調査報告書 第 129 集

鈴木重信ほか 2008「神奈川台場」『第32回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

鈴木次郎ほか 1995『宮ヶ瀬遺跡群』 V、かながわ考古学財団調査報告 4

諏訪間順ほか 1993『小田原城下欄干橋町遺跡』小田原市文化財調査報告書第 42 集

諏訪間順ほか 1999『小田原城下欄干橋町遺跡第V地点』小田原市文化財調査報告 書第 71 集

諏訪間順ほか 2010 『史跡小田原城跡馬出門』小田原市文化財調査報告書第 155 集

近野正幸ほか 1997『宮ヶ瀬遺跡群』XⅢ、かながわ考古学財団調査報告 19

塚田順正ほか 1984『史跡小田原城跡城米曲輪』小田原市文化財調査報告書第 15 集

塚田順正ほか 1995「発掘調査の成果にみる小田原城」『小田原市史』別編城郭 永原慶二 1990「東国における中世の終焉と近世の幕あけ」『小田原城とその城下』 中三川昇ほか 2005『向井将監正方夫妻墓調査報告』横須賀市文化財調査報告書第 41集

平本元一ほか 1995『東町二番』 I

平本元一ほか 1996『東町二番』Ⅱ

三瓶裕司ほか 2007『早川石丁場群関白沢支群』かながわ考古学財団調査報告 213

宮田 眞 2008「東海道藤沢宿(藤沢市No. 78 遺跡)」『第 32 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

山口剛志ほか 1998『小田原城下欄干橋町遺跡第Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告 書第 67 集

山口剛志ほか 2004『小田原城総構伝肇寺西第 I 地点』小田原市文化財調査報告書 第 118 集

山田光洋 2009「神奈川台場(第2次調査)『第33回神奈川県遺跡調査・研究発表 会発表要旨』

山本暉久ほか 1997 『池子遺跡群』IV、かながわ考古学財団調査報告 26

渡辺千尋 2010「小田原城下筋違橋町遺跡第V地点」『第34回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

近代・現代の動向 -近代遺跡の調査研究事例から- 天野 賢一

1. はじめに

神奈川県における近代・現代遺跡の調査研究は、神奈川県考古学会主催で2004年に開催された平成15年度考古学入門講座の「考古から近世・近代へのアプローチー神奈川県内の遺跡を中心として一」で大きく進展した。遺構や遺物から具体的な人物像などを辿る試み(諏訪間・中三川・市川2004)、建物基礎工法に関する建築学的観点と考古学的な調査からの実証(村澤2004)、漁村に築かれた塚の調査によって捉えた近代化の様相(藤山2004)、戦争遺跡に関する調査研究(野内・大坪2004)、横浜の近代遺跡(坂上2004)などがある。近代・現代考古学は、新しい領域であるがその研究の有効性は大きなものがあり、その動向をこれまでの研究成果と今後の展望を含めて見ていきたい。

2. これまでの調査・研究成果

神奈川県考古学会主催の第30回神奈川県遺跡調査・研究発表会においてのテーマ発表「神奈川の遺跡調査をめぐる30年 近代 一近代遺跡の調査事例と今後の課題一」では、これまでの県内調査事例と課題が野内氏によって詳細にまとめられている。工事中の不時発見や遺物採取と記録作業の積み重ねで、おぼろげながらその具体像が浮かびつつあるのがこれまでの現状であった。横浜外国人居留地における本格的な発掘調査として2007年~2008年に実施された山下居留地遺跡に代表されるよう事例も増えつつあるが、現状では埋蔵文化財として取り扱われていない部分も多く、課題として指摘されている。

神奈川県における近代・現代遺跡の体系的な理解を促進した(野内 2006)では、神奈川県内における近代遺跡の調査を概観し、その傾向によって「居留地・国際商業都市遺跡一横浜」・「陸海軍の軍事都市遺跡一横須賀」・「保養地・避暑地遺跡一宮ヶ瀬・大磯・藤沢」・「戦跡・戦災・震災の痕跡一茅ヶ崎・平塚」の4種の特徴に分類している。さらに近代遺跡の特徴として、「本格的な近代化の始まりは地域によって異なり、それぞれに特色があり、それは現在に至る各地域の地域形成史に他ならない」としている。近代遺跡はこの指摘のとおり、地域における個別・固有の事象に特化していることが挙げられる。

3. 近年注目された主な遺跡

横浜市中区 山下居留地遺跡

山下居留地遺跡では外国人居留地における初の本格的な発掘調査が 2007 年~

2008年に行われ、複数の商館と街路が発見されている。調査区に該当する代表的な商館は、48番地(英国系貿易商社・モリソン商会)・54番地(独国系総合商社・イリス商会)・55番地(英国系貿易商社・コッキング商会)の大部分と53番地及び街路の駿河町通りの一部が該当する。調査では幕末から関東大震災に至るまで、複数の建物が重層的かつ複雑に発見されている。発見遺構の複雑な様相に加え、土地の地権者も商業活動の営みに応じて頻繁に移り変わっており、個々の施設を特定することは困難な状況である。また出土品を見ても西洋遺物・国産品・量産品など多岐に及び、研究課題も多く浮かび上がっている。

横浜市西区 二代目横浜駅と横浜電気株式会社

第二代横浜駅駅舎・横浜電気株式会社発電所跡では、近代化の象徴となる鉄道と電気に関連する遺構の発見がある。建築工事現場で発見された大規模な煉瓦基礎遺構は、1872(大正 5)年開業の二代目横浜駅駅舎基礎遺構と、より古い横浜電気株式会社の火力発電所に関する貯水槽などの遺構である。関東大震災で倒壊した駅舎の煉瓦造りの基礎には亀裂が認められるもので、その一部は敷地内で保存・公開されている。

横浜市神奈川区 神奈川台場跡

神奈川台場は、幕府が江戸湾防衛にあたり築いた海防砲台で 1860(万延元) 年完成している。洋上防衛と横浜港警備などの機能を有する人工島で、東海道神奈川宿の沖合 200 mの位置に西南に向かって突出している。「神奈川台場図」や当時の地図などでその全体が表現されており、陸地とは「取渡り道」と呼ばれる2本の土塁で結ばれた特徴的な形態を呈している。現況は埋め立てが進み、景観は大きく変容し、石垣の一部が露出して残る場所や神奈川台場公園に当時の痕跡を忍ぶのみである。横浜開港 150 周年記念事業として公園内の整備が計画され、保存・活用に向けた発掘調査が2007年・2008年に実施された。調査では石垣などその一部が発見されて、遺構の平面的位置の把握と遺存状況などを確認したもので、より具体的にその内容を捉えることができた。

横浜市港北区 日吉台地下壕

日吉台地下壕の調査は 2009 年に実施された。太平洋戦争末期に海軍中枢部のおかれた地下壕であるが、記録類は失われており詳細は不明であったが、発掘調査によって特殊な構造をもつ出入口施設の正確な位置などその一部の具体的様相が明らかになっている。今回の発掘調査は埋蔵文化財としての手続きではなく、慶応大学の施設建設に伴う自主的な環境調査として実施されたもので、戦跡遺跡における保護・保存処置の現況を端的に示しているものである。

横須賀市 猿島砲台跡

横須賀は 1865(慶応元) 年に建設された横須賀製鉄所以降、軍港都市として急速 に発展し、現在においてもその機能を担っている。東京湾に面する地域には、防衛上 の要衝として横須賀港と関連する砲台などが多く築かれ、千葉県富津市の砲台・海堡 と一体となった東京湾要塞群を形成している。横須賀市に所在する猿島遺跡群では都 市公園整備に伴い 2000 年・2002 年・2003 年・2006 年には猿島砲台跡の発掘調査が実施され、戦後に地上構造物が撤去されているが、地中には良好に土木構造物などの遺構が残っていることが明らかになっており、その一部は整備・公開されている。横須賀では猿島砲台跡に代表されるよう軍事施設に関する発掘調査や近代化遺産の分布調査なども含めて総合的な調査が各所で行われ、近代・現代の土木・建築技術に関する調査・研究の先進となっている。

藤沢市 江の島 サムエル・コッキング苑

横浜外国人居留地のメインストリートである本町通に面した山下町 55 番地などで 商館を構えていたイギリス人貿易商のサムエル・コッキングは、百合根貿易や発電施 設やハッカ精製など多彩な事業を営んでいる。晩年には江の島の土地を手に入れ別邸 を構えている。1882 年 (明治 15)には、当時東洋随一といわれる蒸気機関など近代 設備を導入した温室のある大規模な植物園を開園している。現在では江の島サムエル・ コッキング苑として藤沢市により保存・整備され、煉瓦造りの温室遺構基礎や配管な どが保存・公開されている。

東海道藤沢宿

旧東海道の藤沢宿では、2007年に発掘調査が行われ、江戸期と近代の遺構が発見された。整然と並ぶよう配置された建物群や井戸など各施設は、当時の町並みを把握する上でも重要な情報を提供するものである。なかでも石蔵と考えられる建物の基礎遺構は、松杭などの上に切石を垂直に立て、周囲に切石や栗石などが充填される軟弱な地盤に用いられた「蝋燭地業」といわれる特徴的な基礎の建築工法が確認され、重要な調査事例となるものである。

海老名市 河原口坊中遺跡 酒造施設跡

海老名市に所在する河原口坊中遺跡では酒造施設が発見されている。煉瓦造りの半地下構造のかまどの焚き口部や煙突基礎部とそれに続く煙道などで構成されている。相模川を利用した水運の利便性に富む調査地点には、江戸時代後期から続く造り酒屋である「山田酒造」が創業され、大正期には大島酒造と社名が変わり、1935(昭和10)年に廃業している。この酒造施設の明治中頃の銅板画には、敷地全体の鳥瞰図に各施設の名称が符号されており、今回発見された遺構のみならず、敷地全体の具体像を把握することができる。

清川村 宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡

幕末開港にあたって丹沢山地などは十里四方に定められた外国人遊歩区域の限界にあたることから景勝地として紹介されている。豊かな自然環境に恵まれ、美しい渓谷であったため、観光地として多くの外国人が避暑などに訪れている。宮ヶ瀬ダムによって水没した北原遺跡の発掘調査では、宿泊所として利用されていた長福寺の所在していた場所にあたる。出土遺物を見ると幕末の国産陶磁器の他に、皿やガラス瓶など西洋遺物が多く出土しており、外国人の足跡を示す遺物が残されている。

三浦市 ヤキバの塚遺跡

三浦市に所在するヤキバの塚遺跡では、漁村にある塚 (廃棄場)の発掘調査が行われている。塚は、畑地の中に所在し、発掘調査によって明治時代から昭和 30 年代頃までに形成された近代の塚であることが把握されている。出土した生活廃棄物の分析を見ると食生活だけでなく、供物や玩具なども含まれており、信仰に関わる物の「送り場」的な性格も捉えられている。調査成果としては文献など記録資料として残りにくい事柄を発掘調査によって明らかにしたものであり、近代・現代における考古学的調査の有効性を示している重要な研究事例である。

4. まとめ

近年における近代・現代遺跡の具体的な調査事例を概観したが、1859年(安政5) 五カ国条約による開港とともに国際社会への参入を果たし、近代化が急速に大きく進むこととなった。そのなかで横浜は世界の玄関としての重要な役割を担う貿易港となり現在に至っている。

開港に伴って建設された山下(関内)及び山手の外国人居留地では、山下居留地遺跡をはじめ、断片的であるが各地で発見された遺構や出土品を見ると文献資料では把握しにくい、より具体的な事実が明らかになる場合も多く認められる。またこれまでに横浜の近代遺跡から採取や出土した遺物については、横浜都市発展記念館研究紀要において遺物実測図などを掲載した詳細な報告(坂上・青木 2007・2009・2010)があり、遺構のみならず出土品についても具体的な報告資料の蓄積により、体系的な理解を行うべく基礎的な研究が進められつつある。

横浜及び周辺を見ると、神奈川台場は開港に伴って必要とされた外国船の防衛や監視の機能を持つ海防砲台であり、横須賀の軍事施設は、横須賀製鉄所の建設によってはじまり、現在まで軍港としての発展を見ており、貿易港横浜との双璧をなすものである。

さらに横浜から遠く離れた地域を見ると、丹沢山地に所在する宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡で確認された長福寺跡は外国人宿泊所として機能を担うもので、居留地に住む外国人の避暑地として頻繁に利用されており、西洋食器などの遺物が多く出土している。また江の島サムエル・コッキング苑の温室遺構は、貿易商として名を馳せたコッキング氏の別邸で、いずれも開港場である横浜とは切っても切り離せない密接な関係がある。

郊外の農村や漁村において見ても、河原口坊中遺跡で発見された酒造施設のかまどや煙道には耐火煉瓦が用いられており、三浦市のヤキバの塚遺跡でも廃棄した生活材から近代化への変換が把握できることから、都市部のみならず郊外においても比較的速やかに近代化が進行していることが伺える。

近代遺跡をみると、県内には近代化の足跡が多く残され、その多くは現在でも形を変えて踏襲されていることがわかる。開港場における波止場と居留地との関係や軍港と砲台、産業施設など、近代化に寄与してきた遺跡の特徴は、その土地の発展の契機

となる事象に特化した内容で形成されているということが言える。

近代・現代遺跡の調査研究にあたっては、文献資料などによって多くの手がかりが得られ、基本的とすべきものと思われる。文献や絵画・写真資料などでは、街並みや生活など考古学調査では得られない具体的で鮮明な様子が把握できる場合がある。しかしながら絵画や写真資料などでの表現は一側面であり、それでは捉えきれない奥行きの部分を発掘調査で明らかにすることができる可能性が含まれている。たとえばその土地利用の平面的な広がりと、地層に刻まれた時間軸も捉えることができる場合があり、さらにそこで活動していた人々が使用していたものを実際に見て触れることができるのも、考古学的な発掘調査の特徴となるものであろう。

現在に近い時代であり、多くの資料が残されている近代・現代であるが、記録に残っていない、残されていない事も多く、考古学の有効性が発揮できる部分も多くある。 近代遺跡の研究は、文献資料などの分野をはじめ、建築学・社会学・経済学など関係 するあらゆる分野の学問との連携しながら進めていく必要がある。

5. 保存と活用

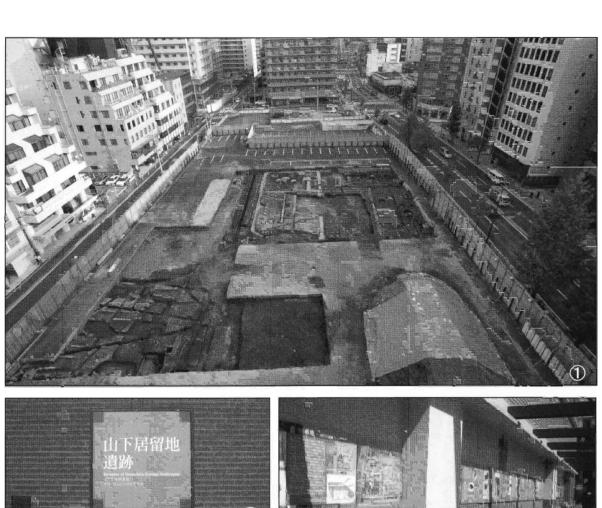
近代建築や土木構造物などは、現在も使用されている場合や、その機能が維持されているものもあり、実際にその施設を見ることも可能である場合も多い。近代遺跡は前述のとおり埋蔵文化財として取り扱われない場合も多く、記録・保存も行われず土木工事などによって消滅してしまう場合がある。これまでに関係機関などの配慮によって僅かながらこれまで保存・公開されているものあり、地域史を物語る実際の資料として有効に活用されているものも多く見受けられる。山下居留地遺跡においても関係機関及び地域住民などの尽力によってその一部が敷地内に移築復元展示された。煉瓦基礎遺構や排水桝など商館の施設と駿河町通りと呼ばれていた街路に敷設された切石側溝・鋳鉄管・下水管などが発見された状況を再現するイメージでプロムナードに設置され、詳細な解説パネルとともに展示されている。その後の活用も地域住民などによる「山下居留地遺跡の価値を考える会」とその母体となった「よこはま洋館付き住宅の考える会」によって、「近代遺跡めぐり見学会」などが企画・開催されている。山下居留地遺跡プロムナードはその拠点となるもので、関内(山下地区)において残る近代建築や点在する保存・公開された居留地の遺構などとともに、よりいっそうの活用が望まれるものである。

引用・参考文献

青木祐介 2005「地中に眠る都市の記憶 地下遺構が語る明治・大正の横浜」横浜 都市発展記念館・(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

青木祐介 2009「横浜建築家列伝」横浜都市発展記念館

天野賢一 2010「山下居留地遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』258 (財)かながわ考古学財団









①山下居留地遺跡航空写真(西から) ②~⑤山下居留地遺跡プロムナード

平成22年度考古学講座 神奈川の考古学・最近の動向

> 編集・発行 神奈川県考古学会 印 刷 株式会社 アルファ 平成23(2011)年3月6日